

安懐南の4つの短編の翻訳と解題

波田野, 節子
新潟県立大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/4797809>

出版情報 : 韓国研究センター年報. 22, pp.25-51, 2022-03-25. Research Center for Korean Studies,
Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

安懷南の4つの短編の翻訳と解題

波田野 節子*

要旨

本稿は朝鮮の作家^{アネナム}安懷南の小説集『火』(乙酉文化社 1947)に収録された「鉄鎖、絶たれる(鐵鎖 끊어지다)」
「島(섬)」^{アネナム}「馬(말)」^{アネナム}「火(불)」の4つの短編を翻訳して、解題をつけたものである。

安懷南は1909年にソウルで生まれ、1931年に登壇して日本の私小説に似た「身辺小説」で主として都市の小市民的な生活を描いた。1944年9月に彼は徴用されて九州佐賀県の立川^{たつがわ}鉦山に行った。34歳の中堅作家だった彼がなぜ徴用されたのかは不明だが、破産して財政的に困窮していたことと関わりがあるのではないかと推測される。彼は炭坑で働いたのではなく、朝鮮人労働者を管理する事務所に勤務したようである。1945年8月に日本が敗戦すると9月末に帰国し、徴用体験を素材にした短編を精力的に執筆して、1947年に小説集『火』を出版した。日本の敗戦後に満洲、中国、日本からの帰国について書かれた小説は韓国で帰還小説と呼ばれているが、『火』もその一つである。

その後、安懷南はいくつかの作品を発表して左翼の評論家から高い評価を受ける。そして朝鮮半島が分断された1948年に家族や仲間たちと一緒に38度線を越えて北に行った。朝鮮戦争終結後、南から行った作家の多くは粛清されたが安懷南は粛清されなかった。だが、その後の行跡は知られていない。

解題

ここに訳出した「鉄鎖、絶たれる(鐵鎖 끊어지다)」
「島(섬)」^{アネナム}「馬(말)」^{アネナム}「火(불)」は、朝鮮の作家、
安懷南が1947年2月に刊行した小説集『火』に収録
されている10編の短編のうちの4編である。

安懷南は1909年にソウルで生まれた。父は開化期に『禽獸會議録』の翻案を出版したことで知られる安国善(1878-1926)で、安懷南が徽文高普3年生のとき事業に失敗して病死した。そのために家族は貧困に陥り、安懷南は退学して図書館に通い1931年に登壇した。のちに彼はこのころ日本の小説をたく

さん読んだと回想しているが、おそらく作者自身を主人公として身辺の事情や心境を描く私小説を多く読んだのだろう。登壇後の彼は家族や友人など身辺のことを語りながら自己の心境を吐露する作品を多く書いて「身辺小説作家」と称された。彼自身はそう呼ばれるのを嫌い、わざわざ工場労働者になったりして社会的な視点をもつ小説を書く努力を続けたが、彼の性格にはリリカルな抒情をとまなう身辺小説が合っていたように思われる。

1944年9月末に安懷南は徴用され、忠清南道燕岐郡の「応徴士」〔当時、被徴用者をこう呼んだ〕134名と一緒に佐賀県の立川^{たつがわ}鉦山に行った。34歳の中堅作家だった彼がなぜ徴用されたのかは不明である。彼には酒癖と浪費癖があり、ソウルの家を1940年に処分

*新潟県立大学名誉教授・九州大学韓国研究センター学術共同
研究員

して小作地のある忠清南道燕岐郡全義に落郷したが、結局破産している。そのあとソウルの製薬会社の宣伝部に勤めて週末に帰宅する生活をしているので、こうした財政事情と関係があるのかもしれない。

『朝光』1944年11月号には応徴士を激励する著名人の手紙が特集されている。そこに掲載された安懷南宛ての11月1日付の手紙「懷南公！」に、金南天は安懷南の飲み友達の李源朝から伝え聞いた話を書いている。「坑内から黒くなって出てきてツルハシを置き石炭の粉を払っていると呼ばれたので行ったところ、明日から事務をしろと言われ、一躍事務員に昇格した」そうで、酒も特配されているらしいと李源朝は羨ましそうだったという。その次の頁に載っている安懷南から林和に宛てた10月17日付「応徴士の手紙」には、「地下数百尺の坑内に入って作業をしているので、瓦斯発生、落盤、炭車の故障が少し心配ですが、10時間以上労働しながらも心と体はいつも健全なことが幸いです」とある。9月29日に鳥致院を發った安懷南が炭坑に到着したあと研修を受けたとすると、彼が坑内で働いた期間はほとんどなかったと思われる。林和への手紙には「石炭」という長編小説を構想中だとあるほか、フリーチェの『欧州文学發達史』や小説を送れという依頼もあって、とても10時間以上炭坑で働いているとは思われない。『新時代』1945年1月号掲載の「応徴作家 安懷南近信」にも、「気候も温和で食物も豊富で仕事も楽になり、これからは読んで書く時間が自由になりそうです」と書いているところを見ると、普通の徴用でなかったことは確かである。

1945年8月に日本は敗戦した。9月末に仲間を率いて密航船で唐津から朝鮮に向かった安懷南は、嵐で対馬に漂着するというアクシデントはあったが10月8日に無事に燕岐郡全義の自宅にもどる。そして徴用体験を素材にした短編小説を精力的に執筆し、当時続々と創刊されていた雑誌に発表した。1946年1月に「鉄鎖、絶たれる」、「島」、「馬」、「その後の話」、「星」の5編、3月に「米」と「牛」の2編、5月に「春」と「夜」の2編、そして8月に「火」を発表し、翌年2月にこれら10編をまとめて乙西文化社から小説集『火』を刊行した。本稿に訳出した

のはこの中の4編である。初出の雑誌は入手できなかったので小説集を底本とした。

以下、4編について簡単に解説する。

「鉄鎖、絶たれる」は1946年1月に『開闢』復刊1号に掲載された。京城隊の隊長である趙瑞根^{チョソクゲン}の目を通して九州の炭坑で迎えた日本の敗戦を描いたもので、京城麻浦の画家とされている趙は安懷南自身と受け取ってよい。

敗戦の衝撃に打ちのめされる田代や、集団となった朝鮮人に狼狽する高木などの日本人の姿のほか、敗戦直後にこの地方に流れた様々な噂や、雷鳴を艦砲射撃と勘違いして半日も怯えていたという興味深い逸話も記されている。食事を目当てに炭坑見学に来た朝鮮人兵士たちが日本の敗戦を知りながら趙に聞かれるまで黙っている姿は、うかつなことを口に出せない生活を続けてきた若者たちのリアリティを感じさせる。また朝鮮にいる日本人の安否に関する噂がそのまま朝鮮人を見る日本人の視線に反映され、咸鏡道の日本人迫害のニュースに主人公が鋭敏に反応することも現場の実感がある。

なお、趙隊長は8月15日の夜から身の安全のために隊長室から朝鮮人坑夫の部屋に移っている。安懷南も解放前は坑夫とは別に個室に寝ていたのだろう。

「島」は同じく1946年1月に『新天地』創刊号に発表された。ここに描かれているのは、炭鉱会社が朝鮮人労働者を留めるために行なった「定着」政策がもたらした悲劇である。「私」が炭鉱で知り合った朴書房^{パクソフバン}は日本人女性と結婚して「定着」し子供もいたが、解放後、望郷の念に堪えられずに妻子を置いて帰国してしまう。そのあと密航船で帰国しようとした「私」は途中嵐に遭って対馬島に漂着し、そこで朴書房に再会する。彼は嵐を天罰だと思いこみ、妻子のもとに帰るといって対馬に残った。しかし2ヶ月後に「私」はソウルで朴書房と出会う。そそくさと消えていく朴書房の後ろ姿を見ながら「私」は波の中に寂しく屹立する島を思い浮かべるのだった。

ところで戦前の対馬には6000人以上の朝鮮人が住んで製炭や海女をしていたが、国境が引かれて朝鮮半島との往来が断絶すると一時密航の中心地になり、その後エネルギーが石油へと転換したため1970年代

にほぼ姿を消したという〔林慶花「쓰시마 현대사 속의 제일조선인」『統一文学』82、2020.6〕。「島」には終戦直後の彼らの過渡的な姿が描かれている。

「馬」も1946年1月に『大潮』創刊号に発表されている。主人公は九州に徴用されて帰ってきた徳万^{トシマニ}である。帰還した徳万が見たのは日本軍において行かれた軍馬の群れだった。駅の近くのあらゆるところに馬が散らばり、安値で取引されていた。徴用に行っているあいだに黄生員に小作地を奪われた徳万は、軍馬の哀れな姿を自分に重ねてボンヤリし、馬に蹴られて大怪我をしてしまう。うなされながら彼は、馬が似ているのは自分ではなく、金儲けに奔走して村の役に立っていない余計者の黄生員であることに気がつく。やがて馬の姿はしだいに消えていき、徳万が杖を引いて歩けるようになるころには、朝鮮の野原は以前のように牛たちがのんびりと草を食む平和な光景にもどっていた。朝鮮から消えていく日本人の姿と軍馬の姿が重ね合されて深い余韻を残す。

「火」は1946年7月に朝鮮文学作家同盟の機関誌『文学』創刊号に発表された。ルポルタージュ風の作品が多い小説集『火』の中では執筆にもっとも時間をかけたと思われ、朝鮮の小正月の伝統行事と風習や料理の話の織り込んで、文学的香りの高い作品になっている。

第2次大戦中、日本海軍の拠点だった西太平洋のトラック島〔現ミクロネシア連邦のチューク諸島〕は1944年2月に米軍の猛空襲により無力化されたが、米軍が攻略せずに進攻していったため敵中で孤立し、島に閉じこめられた兵士たちは極度の飢餓に苦しんだ。そのトラック島に朝鮮の忠清南道燕岐郡から報国隊として送られ兵士にさせられた人物の話である。

小説家である安の隣家の李書房は、報国隊に取られてトラック島に送られ、4年間手紙を出せなかった間に妻子を失ってしまう。小正月の日、安は料理を持って彼に会いに行く。二人は一緒に伝統行事の「野焼き遊び」をし、李書房はトラック島で経験した「火」のことを語る。その夜、彼は家に火を放った。新しい生を求めて故郷を離れると話す李書房に、安はソウルの朝鮮文学作家同盟の事務所の住所を渡して自分を訪ねるよう頼む。もっと大きな小説家にな

ろうとするなら彼のような「新しいタイプの人間」を掴まえる必要があるという安の思いは、左翼の作家として発展しようという安懐南の抱負を投影している。

日本が敗戦すると満洲、中国、日本などから膨大な数の朝鮮人が朝鮮にもどってきた。その前後の事情や朝鮮に向かう旅路を描いた小説は、韓国で帰還小説と呼ばれる。『火』もその一つである。安懐南は自分の帰還小説を「徴用小説」と呼んで『火』の序文にこう書いた。「炭坑を中心とする私の徴用小説は、この作品集『火』のほかにも中編小説「炭坑」と長編小説『死線を越えて』があり、かならず完結させるつもりだ」。しかし『火』を刊行した1947年2月に連載中だった「炭坑」は翌月に、『死線を越えて』は10月に未完で終わった。朝鮮文学作家同盟の小説部委員長に就任して多忙だったうえ、1947年の3・1記念に合わせて「暴風の歴史」を書くことになり、連載に割く時間がなくなったのだろう。とはいえ、徴用で日本に行くまでを語る『死線を越えて』には無理を感じる不自然な筆致が目につき、あるいは徴用のいきさつを率直に語れないことが中断の理由ではないかという疑いを抱かせる。

植民地末期をくぐりぬけた作家たちが解放後に向き合わされたのは自分の行なった対日協力であった。ところが安懐南は徴用されたことがいわば免罪符となって弁明を免れることができた。『炭坑』の連載第1回の前書きは、彼の徴用体験が当時どのように受け取られたかをよく示している。

「わが文壇の重鎮安懐南氏が昨年夏に暴悪な日本の虐政によって九州の炭坑に徴用されたことは、いまだ記憶に新しい。氏は数多くの同胞とともにツルハシを持ち、炭坑の中で襤褸をまとひ、飢えとため息で日々を送った。ここに掲載する『炭坑』こそ、氏自らが体験した生地獄の赤裸々な記録である」〔『民聲』1945年12月創刊号〕

安懐南自身、世の中がひっくり返ったあと世間の自分に対する待遇が違ってしまったと、「出世」に驚いているほどである。〔『汚辱の街』『週刊建設』1-5、

1945年12月22日] 彼が朝鮮文学作家同盟の小説部委員長になったのも、林和、金南天、李源朝などの左翼文壇の中心的存在と友人だったことのほかに、徴用体験によって脚光を浴びたことが作用したと思われる。

林和たちは彼が炭坑でツルハシを持って労働をしたわけでないとは知っていたはずだが、問題にしなかった。それよりも彼が看板作家として組織のためにより作品を書いてくれることを期待したのだろう。実際、1947年の3・1記念に合わせて「暴風の歴史」を書いて高く評価された安懐南は、翌1948年に「農民の悲哀」を発表して左翼の代表的評論家である金東錫から「飛躍する作家」と激賞される。

この年に大韓民国が樹立されると彼は仲間たちと一緒に38度線を越えることになった。彼が左翼思想を真面目に勉強したことは当時の彼の評論に表れているが、どこまで信奉していたのかはわからない。朝鮮戦争後に友人たちは肅清されたが、彼は生きのびた。日本の雑誌『朝鮮文化』の1962年8月号に、朝鮮作家同盟の機関紙『文学新聞』の同年3月に載った安懐南の「南朝鮮のある作家への手紙」という書簡が翻訳されている。昔の友人である韓国の小説家に向けて「人民大衆の中にはいりましょう」と呼びかける模範的な手紙である。だが、その後の彼の行跡は知られていない。

1. 「鉄鎖、絶たれる」

八月十五日、その日も我々はいつもと変わることなく朝の四時に朝飯を食べ、弁当を持って五時に出発し、六時の太鼓の音とともに急いで入坑した。

すべてが、何も変わらなかった。我々は昨日見たものを見、昨日聞いたことを聞くだけだった。坑外ではゴトゴトという音を出して千年でも万年でも動いていそうな送炭搬器が空中にぶら下がり、分鉱機〔石炭を選別する機械〕が動き、トロツコが次々に坑道から出てきた。

それから昼食時まで、第二協和寮はずっと静かだった。北九州は朝鮮よりはるかに暑い。太陽がトタン屋根を溶かささんばかりに照りつけているときも、二番方〔交代勤務の二番目の組〕から上がった人々は狭

苦しい部屋の中で汗びっしょりになって眠っていた。

午後一時ころ部屋の外で重い靴音がして、十四、五名の兵隊がドヤドヤと入ってきた。事務室に腰掛けていた京城隊長の趙瑞根^{チョソグン}は驚いて立ち上がった。

室内に招き入れてみると兵隊たちの顔つきも話し声も違っている。全員、腰に剣をつけられず肩に銃を負うことのできない朝鮮出身兵だった。

「よく来たね」

朝鮮語ではなく日本語で挨拶をして、趙瑞根^{チョソグン}は快活に笑った。

（また飯をおごられにきたな。腹を空かしているんだろう！）

兵隊たちは、朝鮮同胞に会いがてら炭坑の宿所を見学にきたと言っているが、実は瑞根^{ソグン}の想像したように飯をご馳走になるために来たのだ。彼らが来ると朝鮮人の飯係りはできるだけもてなす。すると彼らは久しぶりに腹を満たして帰り、仲間にその自慢をする。そしてまた新しい見学団が訪ねてくるのだ。朝鮮出身兵がいつも腹を空かしている事情をよく知っている趙瑞根^{チョソグン}は、今日も宿所をひとまわりするとすぐに食堂に案内した。

そのときだ。労務課の捜査主任のタシロ（田代）〔上の点は原文がハングル表記された日本語であることを表す〕が顔を腫らし、ハアハアと息を切らせて入ってきた。顔を腫らしてというのは、ひどく興奮して両頬を膨らましてハアハアあえぐという意味である。このタシロは、逃走者を捕まえにいて失敗するといつも顔を腫らすのが癖なので、こいつまたやったなと思って見ていると、

「きさま！」

という言葉が、彼の口から飛びだした。

「何だ！……何だ？」

自分で自分に答えてから、

「寮長さん！」

と呼んだ。だが舎監とお盆に豚をつぶす相談をしながら一緒に豚を見にいった寮長が答えるはずがない。彼は、何だ！何だ？を連発しながら足を踏み鳴らしていたが、趙瑞根を見つめて、

「日本は無条件降伏だ！いいか？」

と言って目を怒らせた。

日本の天皇自身がラジオでポツダム宣言に屈服すると放送したというのだ。外界と完全に遮断されたこの山里には、情報がまったく伝わってこない。はじめ何のことかわからなかった趙瑞根は、事実を理解したとたんに体が浮きあがるような気がした。

だが棍棒を持ったままのタシロが趙瑞根の様子を何一つ逃すまいというように睨んでいるので、どうすることもできない。趙は身じろぎもせずに立っていた。

「うれしいか？」

タシロが尋ねた。

「……」

「うれしいか？」

瑞根は答えることができなかった。

正直に答えれば、すぐにも棍棒が頭を襲うだろう。かといって限りなくうれしいこの消息を否定するのは絶対に嫌だ。

「どうだ？日本が負けた！うれしいか？」

趙瑞根は唾のように聞こえないふりをし、まるで石像のように鋭く硬い表情をした。そして今度はタシロに負けずにトゲトゲしい目つきで彼を睨みつけた。タシロは普段から口癖のように趙瑞根を「不都合なヤツ」と呼び、彼を隊長にしたことを後悔していた。第二協和寮の逃走者が多いのも全部趙瑞根のたくらみだと思い、注意しているところだった。それほどタシロは趙瑞根を憎んでいた。

タシロは棍棒でセメントの床を二、三回打ちつけてから力なく手放した。

「朝鮮人はわからないね……蛇のようなヤツだ」

こう眩きながら、それこそ蛇がスルスルと垣根を越えるように音も立てずに出て行ってしまった。

趙瑞根の心は、何とも言い表わすことができなかった。彼は身をひるがえすと食堂に走っていった。暑い日^{まわり}で周囲は静かだったが、すぐにも大噴火が起きて世界中に響きわたる凄まじい爆発音がし、火影、明るい光、光明の光が輝き、一万人、百万人が声を合わせて空を震わせて叫ぶ、そんなことが起きるような気がした。

自然と体が空中に浮いた。食堂に飛びこむと、飯炊きの光喜^{クアンヒ}がちょうど厨房から出てきた。瑞根は思

わず彼を空中二度蹴りしてしまった。光喜は何が何だかわからず、気違いにいくわしたみたいに驚いた。そして腹を立てた。しかし次の瞬間、その瑞根が両腕を広げていきなり抱きつくではないか。腹を立てるわけにもいかず、ますます驚いた。そのとき瑞根の熱い吐息が耳にあたり、

「朝鮮、独立……^{マンセー}万歳！」

という声が聞こえた。

「えっ？」

光喜はもともと無知なヤツだ。よくわからないらしい。瑞根は彼を離して説明した。

「戦争が終わった……日本が負けた……朝鮮が独立する……我々は故郷に帰るんだ……」

よくわからなかったが、故郷に帰るという言葉で想像がついたのか、みるみる光喜の顔がゆるんだ。瑞根の手をつかんで「あはは！」と叫んだ。

兵隊たちが座っている場所に行くと、瑞根のはからいでもう食事が出ていた。

「皆さん！」

瑞根は彼らに近づき、さっきとは違って朝鮮語で呼びかけた。

「いま聞いたところ、日本は降伏したそうです。皆さんは知らないのですか？」

もちろん今度の戦争はきっと日本が負けると信じていたが、これほど早く負けるとは思わなかった。それだけに、実は瑞根の心にもこれは果して事実なのだろうかという疑いがないわけではなかった。

この言葉を聞いて兵隊たちは下を向いた。どんな態度を取ればいいのかわからないようだ。それから、日本の軍人でありながらその態度は何だ、つづいて、お前は朝鮮人のくせにはっきり意志表示ができないのか、この二つのあいだでさまよい、さまようこと自体が恥ずかしいというように一斉に顔を赤くした。

「事実であることを祈ります……」

この言葉を、瑞根も大きな声で言えずに小声で言い、彼らの気配をうかがった。と、そのうちの一人が、いきなりバネが外れたようにパッと立ち上がった。これまで返事できなかったのが申し訳ないと言うように頭を掻きながら、

「はい、事実です。これで助かりました」

と言った。何人かの口から笑い声はじけた。すると今度はもう一人が立ち上がって口だけ動かしたが言葉が出てこない。ただ、

「マンセー！」

と、そこに集まった人々の鼓膜も破れよとばかり、大声で叫んだ。

「マンセー！」

と、また一人が立ち上がって叫んだ。

「朝鮮マンセー！」

また一人。

「独立マンセー！」

「朝鮮独立マンセー！」

最初は一人ずつ、次に声を合わせて一斉に叫んだ。笑いながら誰もが目をこすり、指先を涙で濡らした。

時ならぬ騒動が起きた。あちこちの坑夫室から人々がぞろぞろと出てきた。寝ていた人たちも皆、目を覚ました。

趙瑞根は彼らに、戦争が終わったこと、日本が降伏したこと、朝鮮が独立すること、我々はすぐに故郷に帰ることになると説明した。まるで広い水面に石を投げこんだようなものだった。波は広がるにつれてだいに範囲が大きくなった。石は一度だけでなく、何度も何度も投げられた。波がしだいに大きくなってうねり始め、ついには激浪となって丘陵を崩すことにも似ていた。

広い食堂に人々がすし詰めになった。誰もが笑い、泣き、騒ぎ、動きまわった。キセルを口にはさみ、酒を調達に行くと言って大きな瓶をさがす者、牛を一匹つぶそうと言う者、外から果物を買ってくると言う者、大騒ぎだ。

「寮長のヤツが来る前に、マンセーを叫ぼうぜ」と誰かが言うと、

「なんだと。あれがいるとマンセーができないのか？」

と、何人かが騒いだ。それで、バツが悪そうに、

「マンセー……ちえっ！」

「なんだ、そりゃあ」

「マンセーだよ」

「マンマンセー！」

「マンセー！」

だんだんとマンセーの声がそれらしくなった。趙瑞根だけでなく、集まった者は誰もが自分たちがしっかりとマンセーを叫んだことに満足し、決して恥ずかしくないと思安したのだった。

その日の夕方五時、二番方が入坑する時間に作業中止の通知があった。降伏したという噂が広まると、労務課と鉱務課で仕事をこのまま続けるかやめるかで揉めているうちに噂が坑内に届き、坑夫たちがほとんど昇坑してしまったのだ。

「仕事はやめだとき！」

坑夫たちのあいだには、早くもそんな話が伝わった。坑内で働いていた朝鮮人坑夫は、日本人たちが皆上っていくのでわけもわからず一緒に上がり、意外なニュースを聞いて大喜びした。

日本人たちは遅くまで集って会議をしているようだった。採鉱課の主任のウジヤ（氏家）というのが悲憤慷慨に堪えず、

「我ら日本人は、英米のために石炭を掘る必要はない。何で石炭を掘るんだ？ アメリカの奴を喜ばすのか！……」

会社の営業方針のため作業を継続すべきだという主張に猛反対してこう繰り返し、

「朝鮮人をどうする？」

という問題が出たときは、

「送り返す！ 鮮人のこと〔など〕知ったもんか」

と吐き捨てたという噂が流れた。

それを聞いた朝鮮人たちは憤慨して「とんでもないヤツだ。殺してしまえ！」と言ったが、趙瑞根はこういうときに東京震災の朝鮮人虐殺のような事件が起きるのではないかと心配になった。それで彼は日本人との衝突を極力避けるよう坑夫たちを説得し、できるだけ寮から出ないことと、一人で外出せず何人か一緒に出歩くよう力説した。

実際、日本人の様子が変わった。昨日まで、いや、ついさっきまでのそれと全然違う不思議な視線だった。九州の地はどこにでも竹がある。彼ら皆がそれで竹槍を作っているという噂が立った。そして夜になると彼らは日本刀を抜いたまま歩きまわった。

労務課のタカギ（高木）という奴は深夜に泥酔して朝鮮人寮を歩きまわり、槍をひらめかせた。退役

中尉の彼は剣術の名人という噂だった。彼が持っている槍は竹槍でなく本物の鉄槍だった。

第二協和寮に来ると、わざわざ趙瑞根を呼んだ。

「ちょおーくん」

「ちょおーくん」

彼は趙が前にいるのに、知らないようにとぼけて大声で呼んだ。

「はい！」

趙瑞根は両手をそろえて彼に近づき、おとなしくその前に立った。

「うん？ おまえ？ 趙か？ ……日本が負けた！ エイ、白惜しい。残念だ」

そう言いながら、壁に向けて力いっぱい槍を投げた。槍は壁におすりと突き刺さった。槍の柄が震えている。

「お前はいい気持ちだろう？」

しかし、趙瑞根はさっきのタシロのときと同じくわからないふりをし、唾のように、石像のように立っているだけだ。

タカギは昼間に朝鮮人坑夫が万歳を叫んだことを知り、その腹いせをしに来たらしかった。

「バンザイ、やらんか？」

と趙瑞根に、自分がいるところで一度やってみると言うのだった。そうすれば壁に刺さっている槍が、お前へのよい贈り物になるという意味だ。そして突然、

「庄かしては返さんぞ……」

と言って飛びかかったときは、趙瑞根は自分の命もこれまでかほとんど絶望した。

その瞬間、坑夫の部屋からにわかに喊声が上がった。

「日本人を殺せ！」

という声だった。もちろん誰が上げた喊声かわからなかったが、間違いなく朝鮮人坑夫たちの熱気にあふれた声で、それも一人二人でない大勢の声であることも確かだった。これが趙瑞根の危機を救った。

肝を冷やしたタカギは、尻込みという卑怯な挙動を見せた。そして、

「趙！ お前は共産党だろう？」

とコケ脅しを言ったのは、どう見ても自分の失態を糊塗するためであった。

「我々の手で日本人をやっつけるぞ……」

そう叫ぶ声のはっきりと聞こえてきた。いいタイミングだった。タカギがあたふたと壁に刺さった槍を引き抜こうとするのを見ながら、趙瑞根は、敗戦国民とはこういうものかと思った。タカギは明らかにもう昨日までのタカギではなかった。

趙瑞根は急いで坑夫たちの部屋に逃げていった。その夜から彼は隊長室を出て、坑夫室で数十名の坑夫のあいだに混じって寝ることにした。

彼は同じ故郷から来た仲間たちと話しながら、寝ころんで声を出して笑った。笑いが無限に湧きあがった。すべてが楽しく、可笑しいことばかりだ。タカギの醜態が目に焼きついていて、あのウェノム〔日本人の蔑称〕がもったいぶって武士みたいに振舞ったあげく狼狽した姿がなんとも可笑しかった。面白い一方で、この奇異な現象にはどこか印象深いものがあつた。タカギが趙に向かって共産党だと言ったのも可笑しかった。趙瑞根自身も共産党を知らなかったが、彼らはあまりにも共産党を知らず、それに趙がどういう種類の人物か全然わかっていないようだった。

趙瑞根はまだ名の売れてない画家だった。だが彼はここでは会社員ということにしてあつた。朝鮮の地を離れてみるといつも朝鮮の地が恋しく、九州で見るすべての風景はまず感情的に受けつけなかった。それで麻浦にいるとき隣りの家に住んでいて、班長として一緒に来た金憲来が、

「だけど、ここの竹林はいいですよ。スケッチしてはどうですか」

と絵を描くよう勧めたが、趙はスケッチも断り、鉛筆も取ろうとしなかった。彼らが徴用に取り立て一年になろうとしていた。

その間に自分が率いてきた京城隊の隊長になった趙は、事務室に座りながら、坑夫たちが仕事に出がらない気配があれば休ませてやり、配給物品などは坑夫以外に一切流れないようにして彼らの便宜を図ってきた。ひそかに逃亡も沢山させた。もちろん坑夫を怒鳴ったり殴打することは絶対になかった。

これが労務課の日本人たちの目に障り、

「部下を可愛がるのはいいが、可愛がるだけではいかん。坑夫が生意気だったり悪いことをしたときは、チョクチョク殴らねばならん。隊長は坑夫を殴れ。それから言葉遣いは必ずぞんざいにしろ」

という抗議を兼ねた命令を受けた。だが、その後も趙瑞根の心と態度は変わらなかった。彼らを愛してその便宜を図った。その結果が労務管理には少なからず邪魔になったらしい。日本人は一斉に趙瑞根を不良思想者として扱いはじめた。タシロに憎まれたのも、タカギが共産党だとコケ脅しを言ったのも、皆そのために起きたことなのである。

それにしても思いだすとヒヤリとした。彼は寝ころんで、タカギの槍に刺された自分が鮮血をまき散らして倒れる場面を何度も思い描いた。そして自分が死ぬことよりも、死ねば朝鮮に帰れないという悲しい事実思い当って戦慄した。自分が朝鮮の地を踏めない無念さと悲しみより、帰ってこない自分を待って何年でも涙を流して待っているはずの老いた両親と妻の哀れな姿に思い至ったとき、その不安とヒヤリとした感覚は言い表わせないほど彼の心を揺さぶり、体をブルブル震わせた彼は我慢できずに寝返りを打った。そして何としても生きて家に帰らねばと決心した。

それだけに、あんなにヒヤヒヤさせられたタカギがあっけなく追い払われたことは、考えれば考えるほど可笑しく、面白く痛快だった。タカギという個人のあの姿はそのまま連合国の前に屈服した日本という国の姿であり、それは彼らが予想もできなかった「敗戦」という事実と観念に圧倒されているためなのだと感じた。その後、趙瑞根は多くの日本人にこれと同じ例を発見した。

翌八月十六日は、日本人たちの名節、お盆だった。この日に配給する予定の焼酎は何日も前から寮に運んであり、昨日の午後に寮長と舎監が何も知らぬまま豚をつぶす許可を出していたおかげで、朝鮮人たちは朝早くから宴を開くことができた。

日本人にはお盆の宴かも知れないが、我々朝鮮人にはそのまま解放の祝賀宴だ。豚は朝鮮ではお目にかかれないほど大きいヤツだった。なにしろ朝鮮人

坑夫が豆の残りカスと海水に漬けた大根の切れっばしを食べているときも、豚は舎監の家族が食べ残した飯を食べていたのだ。

だがその大きな豚の肉は、坑夫たちのところには一切れすらまともに回って来なかった。そいつをつぶすと、まず炭鉱所長、労務課長と代理、寮長、外勤に切り分けて配り、次に舎監の家族と事務員が食べ、残った脂身だけを大釜でブタジルにして坑夫に一鉢ずつ配るのだった。

もちろん焼酎も同じ方法で、坑夫にはせいぜい二、三杯がいいところだ。舌の先だけちょっと湿らせて脂の匂いだけを嗅いだ坑夫たちは、朝鮮人部落に行って安いマッコリとオカラのチゲで宴の続きをするのだった。

趙瑞根は朝から新聞が来るのを待っていた。素晴らしい記事が載っているはずだった。最近空襲のために新聞が二、三日分一緒に来ていたが、昨日の十五日は来ていないので今日は来るはずだ。高貴な客を迎えるような思いで瑞根はチラチラと時計を見上げては外に出て、遠い村の外を眺めながら新聞配達夫が現われるのを待ち構えた。

そうしているうちに坑夫たちにつかまって彼らの部屋に引っ張られていった。竹の墓塵の上にマッコリの瓶が一つ置かれ、どこで手に入れたのかコチュジャンと青唐辛子、ニンニクとタクワンがツマミとして準備されていた。配給された焼酎も、仕事に携帯する水筒に入れてあった。趙瑞根に飲ますために何人分か集めておいたらしい。坑夫たちは豚汁をあまり好まなかった。カスばかりのうえ、ふだん大根の切れ端しか食べない腹にいきなり豚の脂をぶちこむと下痢をしてしまうからだ。

「さあ、コチュを食べてみるか……」

と、彼らは生唾を飲みこんで青唐辛子をつまんだ。九州でできる唐辛子は朝鮮ものと違ってただ辛いだけだ。朝鮮産は辛いけれど甘くてコクがある。それで寮の舎監がわざわざ朝鮮の種を手に入れて前の畑に植えたものを、坑夫たちは夜になるとよく盗んで食べた。趙瑞根は隊長室に座ってそれを見ながら目をつぶり、坑夫たちが朝鮮種の青唐辛子を食べる機会を作ってやった。

趙瑞根がこうして坑夫たちの面倒を見るので、坑夫も彼のことを慕った。皆で酔っぱらい、抱き合って踊った。弁当の蓋、水筒、どんぶりを叩いてトゥレ〔農作業の景気づけに演奏する農楽〕のように楽しんだ。「カンガンスォレ」の歌と「倭将清正あらわる」の歌も登場した。部屋の中は埃で白くかすんだ。これまで趙はこんなに自然に他人と一緒にになって踊り歌ったことがなかった。感激にたえず、彼はこっそり外に出て流れる涙を拭った。

昼すぎに新聞が来た。趙は新聞紙を広げながら手が震えるのを感じた。いつも見ている佐賀新聞と西日本新聞という新聞だが、こぶしのような活字が今日はひときわ新鮮で、趙の期待したとおりにすべてを事実によって証明していた。

天皇がポツダム宣言を受け入れること、会談の内容、カイロ会談の話まで詳しく報道されていた。カイロ会談の一節、

——前記三大国は朝鮮の人民の奴隷状態に留意し、やがて朝鮮を自由且独立のものたらしむるの決意を有す。

これを趙は、文字全部を瞳孔にねじこもうとするように一つ一つの漢字を睨みながら読み、また読んだ。

(朝鮮)

(自由、独立)

という文字を、口の中で何度も呟いてみた。

昨日、タシロが伝えた言葉を聞いて食堂に行き、体を躍らせて厨房係りの光喜を足蹴りしたときとまったく同じ感激と心がよみがえった。坑夫たちが皆仕事の苦勞から解放され、家に帰る希望だけを抱きながら顔を紅潮させて子供のように歌って踊る光景が、いよいようれしくて満足だった。趙瑞根と一般の朝鮮坑夫たちは解放されたことは同じでも、感激の性質に少し違いがあった。

趙が感じている感激は坑夫たちのそれに比べて範囲が広がった。坑夫たちは何も考えずに家に帰るといふそのことだけで感激し満足している。憎い日本が負けたとか、朝鮮が解放されたとかは第二、第三で、朝鮮人は朝鮮に帰るのだ、我々全員は来たときと同じように皆一緒に家に帰るのだということが第

一だった。

(それでは日本人はどうだろう?)

趙瑞根はそれが気になった。労務課で連日会議をしているほかは、日本人たちは何の変哲もなく呑気にお盆を楽しんでいた。日本人坑夫たちは赤い顔をして歩きまわり、女たちもいつもと変わらぬ恰好で食料を買うために出歩いていた。夜は芝居小屋も満員だった。

考えてみれば何の不思議もなかった。日本人だって戦争が嫌いなのだ。日本の敗戦が事実だとしてもどうにもならないし、きっと平穩に受け入れるだろうと趙瑞根は前から予測していた。ほかの予測と同じようにこれも当たったというだけだ。しかし八月十五日以前のようにすべてが虚偽、誇張、汚濁ではなく、事実のまま、ありのままに現実が現われていること、それだけでも趙にはたまらないほどうれしくて愉快だった。

朝鮮人を送り返すことが正式に決まったという噂が流れた。日本人坑夫たちが朝鮮人に会えば、いつ朝鮮に帰るのかねと聞くのが挨拶代わりになった。仕事に行かなくてもいいよと言って、彼らも仕事に出なかった。女たちはあちらでも米の配給やその他の配給制度は同じなのかと尋ねた。子供たちは朝鮮にもテシノーヘイカが新しくできるのかと聞いて趙瑞根を笑わせた。

労務課の給仕をしていた少年は新しくできた少年警察官に選ばれ、誇らしげに警察官の制服を身につけて炭坑の無知な若い娘たちを驚かせ、快活にふざけまわった。

「政府が敗けた。軍隊が敗けた」〔ママ。後ろに「軍隊は負けないのに政府が負けた」という朝鮮語訳がついている〕

少年たちは騒ぎながら、少しも心配なさそうに喜々としていた。連合国の軍隊がいつどこに上陸するという記事を読みながら趙瑞根は、日本人はまだ自分たちの運命を知らないのだと思った。

ところが突然、また戦争をやるという噂が流れて人々を驚かせた。日本人の氣勢がまた上がったようだった。再び猫みたいにとゲトゲしく凶暴になった。

——負けたのは政府で、軍隊が負けたわけではない

という考えの延長だった。米軍が上陸したら待機していた軍隊が徹底的に粉砕するために、海岸地帯に凄い準備をしているというのだ。

続いて避難民がなだれこんだ。海岸から避難民がおしよせ、少しでも山の中へ、海岸から遠いところへと向かっていった。

この混乱を防ぐために三カ月分の米を一度に配給した。これは大きな効果があった。

ところが米を一度に三カ月分配るのは米軍に奪われないためだという噂が広まり、まもなく砂糖も一人当たり三、四斤を配給した。米軍が入ってくればカネを払わずに持っていくと言って、果樹園でナシとブドウを大安値で売りだした。

軍用品の酒石酸〔催眠薬や鎮静剤〕を作るために他所には一粒も出さないようにしていたブドウが、山のように店に積まれた。

「ほら、戦争をやめたらさっそくこうだ。いいじゃないかね？」

趙瑞根はある日本人坑夫にこう言って様子をうかがった。彼は頭を搔いてニッコリした。そして何度もうなずいた。趙瑞根は満足だった。

世間では坑夫といえば無頼漢が多く、ヘンクツで乱暴な人々と思っているが、実際に接してみると趙瑞根はその単純で善良なことに驚いた。朝鮮ならとても興行できないような三流四流のデタラメ歌劇団を朝鮮人たちが組織して九州の炭坑地帯を巡業するのだが、日本人坑夫たちはそれを喜んで見に行く。デタラメ歌劇団を見物して笑いながら手を打っている日本人坑夫を、趙瑞根はじっと見つめた。山の中の日本人の文化程度が朝鮮の農村より下であることは、朝鮮人が逆に日本人を支配しているような妙な錯覚を味わせた。そんな純真な国民の前で、日本帝国主義の戦争観と戦争政策が余すところなく暴露されたザマが趙瑞根には痛快だった。

（政府が負けたのであって軍隊が負けたのではないかと？）

戦争に負けようが勝とうが、終わってうれしいと言う日本人坑夫を見て日本国民の真の姿を発見した趙瑞根は、そんな言葉を一笑に付すことができた。

（痛快だ！日本人は完全に負けた！）

最大の満足感を持って、こう結論づけることができた。そして趙瑞根は、日本人のうちで憎いのは帝国主義者とその走狗であって炭坑の坑夫は憎くないと思い、頑固な民族感情を牽制して、日本人の中にも憎いやつとそうでないやつがいることを朝鮮人労働者たちに説明してやった。

「日本人は全部殴り殺さなくてはならん」と言うとき、それがタシロやタカギに向けて言うときは正しくても、朝鮮人歌劇団を追っかけている日本人坑夫に対しては正しくないのだ。

八月十七日は曇りだった。朝から、唐津方面で大砲の音がした。

「艦砲射撃だよ……」

と日本人たちは皆真っ青になった。趙瑞根も、金憲来班長も、そのほかの朝鮮人坑夫たちも、皆が大砲の音だと思った。後でわかったことだが、それは大砲の音でも艦砲射撃でもなく、鈍くゴロゴロと鳴り響く雷だったのだ。空は煤を塗ったように真っ黒で重苦しく垂れていた。その中から終日雷鳴がするのを朝から正午過ぎまでずっと大砲の音だと思っていたのだから、枯れ尾花に驚いたようなものである。

しかし趙瑞根にはこれも愉快だった。政府が降伏しても日本軍がそれに従わず最後まで抵抗するという噂は彼をひどく心配させた。想像を絶する混乱がまた起こり、その混乱の中で朝鮮人が恐ろしい試練を受けるのではないかと思ったのだ。だが日本軍が最後に抵抗するというその噂はよく考えればひどく滑稽で、まるで漫画のような気がした。ちょうど雷鳴を大砲の音だと思ふような馬鹿げた噂……彼はその噂がそんな見当はずれのデマであることを願い、かつそうとしか思われず、安心したのである。

訓練所の所長のマツサキ（松崎）という男が朝鮮人訓練生を集めて、

「日本はこれから英米に制御されて生きねばならぬ。いや、チャンコロからまで圧政を受けるだろう。それを考えると身震いがする……」

という訓話をした。趙瑞根の目に、それは実に笑えない醜態だった。いったい自分の国の事情が朝鮮人青年たちに何の関係があると思って、以前と同じくそんな訓話をしたのだろうか。実に呆れた話だ。

「チャンコロからまで……」という言葉聞いて趙瑞根は、背中に冷水を浴びせられたようにゾツとした。明治、大正、昭和の近代を通して発展した帝国主義日本の国民が、どれほど朝鮮人と中国人を見下げて蔑視しているかの端的な見本だった。

「諸君は朝鮮に帰っても日本との因縁が切れるわけではない。もし我々がチャンコロからまで圧政を受けたらどうして我慢できる？……」

実に聞くに耐えない言葉だった。悪質中の悪質だ。明らかに朝鮮人と中国人のあいだを裂こうとする言葉だ。最も狡猾で学のない日本の一国民の口から、無心(?)と思われるほど簡単にこんな言葉が出てくることは深く研究すべき問題だと、趙瑞根は長いこと驚いていた。

だが、そのマツサキもタカギと同じだった。朝鮮人の声が少し大きくなると、何かを警戒するような、何かに驚いたような目で訓練生たちを見つめるのだった。趙瑞根と視線が合ったとき、瑞根の目に明らかな憤慨と軽蔑の色があったのに、マツサキはそっと目をそらして通りすぎた。その数日前に彼が日本の特攻隊の話をも神聖なもののように得々と話したとき、趙瑞根は興味がないような顔をして聞き流していた。そのとき彼はすっと立ちあがって瑞根を睨みつけた。その彼があつという間にこれほど変わるとは。おまけに、そんなマツサキが砂糖の配給を受けるときには自分の地位を利用して人より一斤でも多くもらおうとして、趙瑞根だけでなく朝鮮人全員から嘲笑と蔑視の対象になった。

そのうちに、またもや避難騒動が起きた。

「チャンコロが上陸するそうだね？」

日本人たちは皆、目を大きく見開いて口々に叫んだ。中国の軍隊の上陸は誰にとってもひどく怖いらしかった。米国や英国はいいが、中国軍が来れば財物も女も全部奪ってひどい目に遭わせるはずだというのだ。

「日本も支那に行って随分ひどいことをやったからね！」

前に南支那に出征して負傷して帰ってきたというマツモトという人がそう言った。中国の軍隊が日本に入ってくれば仕返しをするだろう、日本人はそん

な報復を受けても仕方ないのだと言った。この人はかなり反戦的で、敗戦思想を持った人だった。

それと同時に日本人と朝鮮人のあいだの感情が悪化していく兆しが見えた。朝鮮人労働者が日本人に預けた洋服や洗濯物とか、修繕に出した時計のようなものを、主人が避難したと言って出してくれないことが頻発した。それで朝鮮人は日本人を罵り、日本人は朝鮮人労働者を憎みはじめた。

朝鮮人が農園に行つてブドウとナシを食べながら暴行したという噂が流れた。日本人がまた一斉に槍を作っているという噂も飛んだ。労務課の職員たちは、

「さあ、上陸軍とやることになるよ、これがもの言うさ……」

と言って今度は竹槍でなく鉄槍を作りはじめ、皆が銃を負って歩いた。

朝鮮人たちは、作ってきた鉄槍を木の柄につけながら、

「あいつら、これで俺たちを殺すつもりじゃなからうな？」

「作ってやったもので殺されるんじゃないか？」

そんなことを言った。事実、連合国の上陸軍を警戒するために作るのだという槍と銃剣は実は朝鮮人を害するためのように思われた。

そのとき間の悪いことに、日本にいた朝鮮人兵が朝鮮に帰る途中、船で日本人将校の引率者を殺したとか、水中に投げこんだとかいう噂が流れた。それどころか朝鮮で日本人の家屋と財産と女をすべて奪って男を殺しているという噂が聞こえてきた。日本人を見ると、同じ労働者であっても目つきが変わったようだった。明らかに目が血走っていた。事件が起きそうだと思った趙瑞根は、仲間にできるだけ外出しないよう、日本人の感情を傷つけず表だって機嫌を損なわないよう言い聞かせた。とりわけ朝鮮で日本人を殺しているという噂が聞こえてこないことを願ったが、海岸が近いところなので朝鮮の消息が連日のように聞こえてくる。

何日間かは生きた心地がしなかった。趙瑞根は朝鮮の地で起きていることを頭の中で噂のとおり思い浮かべた。だが、そうしたことが新聞に堂々と報

道されないのを見ると信憑性はないと思われた。ところが数日後、今度は新聞にまで北朝鮮の咸鏡道地方で日本人が迫害されているという扇動的な記事が載りはじめたのである。

「逃げましょう」

班長の金憲来が近づいてきて、そう言った。

「逃げ出すのが上策かな」

彼の言葉に引きずられて、趙瑞根も考えてみた。しかし、そんなことをして失敗したら大変だ。炭坑側で朝鮮に送り返してくれると言っているのに、どうして逃げだすのだ。何か変なことを考えているのではないかと言われたら、答えに窮することになる。そんな危ない橋は渡らず、慎重に対処しようという考えに傾いた。そんなとき趙瑞根は、八月十五日に食堂に来て食事をふるまわれ、マンセーを叫んでいった朝鮮兵たちのことを思い浮かべた。日本人将校を海中に投げこんだというのは、もしかしてあの青年たちではないかという異常なほどの感傷に襲われた。一人ずつ次々に立ち上がり、必死の勇気と良心をもってマンセーを叫んだあの青年たちが祖国朝鮮に帰るために命がけで日本人と戦っているのを思い描くとジーンと涙が湧き、同時に炭坑の朝鮮人労働者のことを思って知らぬまにこぶしを握っていた。朝鮮人労働者と皆で一緒に帰るのだ、一人で逃げるような卑怯なことはしまいと決心した。

そのときベルが鳴った。労務課から趙瑞根を呼び出す電話だった。何だろうと、時が時だけに胸がドキンとした。

行くと、労務課長が趙瑞根をそこに立たせ、最近なか企んでいるそうだが、いったい何を計画しているのかと質問する。趙は答えずに立っていた。課長はしばらくそのまま趙を見つめていた。書類をひねくりまわしていた課長が、いきなり怒ったような声で言った。

「貴様は、あした帰れ！」

「私一人ですか？」

そんな風説が先日もあったので予想していた趙瑞根がただちに聞き返すと、

「いや……みんな連れて、さっそく帰れ」

朝鮮人は送り返さないという噂もあっただけに、

趙瑞根の感激と喜びは大きかった。事務室を出て炭坑の黒い坂道を歩きながら、何度もマンセーを叫んだ。前方の空に突然大海原が降りてきて、その上に朝鮮につながる洋々たる波路が見えるような気がした。寮に帰ってみると新聞が来ていて、米軍が初めて日本の首都東京の代々木飛行場に進駐して占領したという記事と写真が出ていた。万事解決だ。朝鮮人炭坑労働者たちを繋いでいた鉄鎖はついに断たれたのだ。

2. 「島」

日本にいる朝鮮人は全部帰ることになるという噂が流れると、荷物を作るんだと言って急に忙しくなった。

炭坑にいる朝鮮人たちにとって、八月十五日の解放の喜びはひとしおの感激を伴っていた。

炭坑というところは、人間を一度捕まえたなら離そうとはしない。地中数千尋^{ひろ}の穴の中に放り込んだが最後、いつもそこで降りたり登ったりするだけで、ほかのことは何もさせてくれない。

だから、恒常的に逃亡が起きる。逃げだして捕まってくる人間も多い。逃亡させまいと服を取り上げ、賃金も全部は渡さないの、ボロを着た朝鮮人労働者を見ればすぐに炭坑から逃げてきた人間だとわかり、捕まえられてしまうのだ。

だが、それでも一度、二度、三度、いや際限なく逃亡は続いた。死地から脱出する道はこれしかないからだ。

そこで、のちに逃亡防止策として考え出したのがいわゆる「テイチャク」〔上の点は原文がハングル表記された日本語であることを表わす〕政策というやつだ。労働者の家族を炭坑地帯に連れてこさせて家庭生活をさせるという方法である。要するに家族が人質になっているから「テイチャク」した人間は逃亡できないというわけだ。

朝鮮から両親や妻子を呼びよせて炭坑に住ませた人間は、これでもう一生この地獄から逃れられないと思った。

だから解放を迎えたときは夢でないかと呆然とし

た。来たときと同じように男は荷物を背に負い、女は頭に載せて懐かしい朝鮮をめざして帰りながら、我々は「解放」という二文字の広大な意味をまさに心の底から実感したのである。

(朝鮮に行くぞ！)

(まぎれもない解放だ！)

足取りまでが自然とリズムカルになって、半分踊っているかのようだ。

しかし、炭坑で日本人の女と所帯を持っていた男たちは気の毒だった。とくに子供が何人もいる人は問題だった。もちろん彼らの誰もが朝鮮に帰りたと思っていたが、日本人の女が朝鮮に行くのは絶対にダメで、朝鮮人は日本に残ってはいけないというので解決がつかなかった。

いや、朝鮮人が日本に残るのは自由なのだが、彼らは誰もが朝鮮に帰ることを望んだ。そもそもこの地で日本の女と結婚して定着したこと自体が強制的だったのだし、朝鮮人の男としては仕方なく、いわばやむを得ない事情に迫られて始めた生活だったからだ。

朴書房^{パクソフバン}もそうした事情で悩んでいる一人だった。

「安さん。どうしたらいいんだ」

彼はいつも私のところに来て訴えたり、相談したりするのだった。

「夢にも忘れられん故郷に帰らんわけには行かんし、あれは連れていけないし……安さん、何か言ってくれよ……」

しかし、私は何とも答えようがなかった。問題は明らかであり、実行するかどうかは絶対的に本人の意思にかかっている、私の言葉で左右される性質のものではなかったからだ。

子供は二人だった。一人は乳飲み子で、もう一人は五歳の女の子だったが、この子は父さんが逃げると言っていて、いつも朴書房の手にしがみついていた。母親がそうさせているらしかった。

「そりゃあ、行きますともさ。妻も子も全部おっぼりだして行きますよ。やれやれ、朝鮮でも日本でも女は一緒ですな。泣くわ、喚くわ、まるで親の仇ですわ。おまけにガキはピツタリくっついて離れないときている。ありゃあ女じゃない、子供じゃない。

全部おっぼりだして行きますともさ」

見ればテニム〔バジの裾を締める紐〕は結んでなくてだらしなかった。日本の女と暮らしながらよくまあ朝鮮服を手に入れたものだが、白いバジとチョゴリを着ながらチョッキはつけず、おまけに腕を組んでのそのそと歩くのが可笑しくて、彼の挨拶を真面目な顔で受けることができなかった。もちろん帽子はかぶらず、古い草鞋を引きずっている。

そんな恰好をした彼が、朝鮮服をきちんと身に着けカバンと荷物を持って家族連れで旅発っていくたくさんの坑夫たちの間に消えていくのを見ながら、きっと夕飯時には気落ちして帰ってくるだろうとばかり思っていた。

ところが彼はその日帰らなかった。翌日妻あてに届いた葉書には、簡単に、

「俺は朝鮮へ帰るだ。」

と日本語で書いてあった。よく見ると、あの日一緒に出発した指導員の張の筆跡である。朝鮮に帰るという意味を代筆してやったらしい。

腰のあたりが擦り切れたみっともないバジを穿いて汽車に乗っている朴書房の姿を、私は何度も想像してみた。

そんな場面を頭の中で描きながら、彼の妻である日本人に、

「またご主人から詳しい手紙が来るでしょう。気を落とさないでお待ちなさい」と言った。

話を聞いた私は、彼は一人で帰ったのだろうと思った。彼の以前の言葉は一人で朝鮮に帰るための言い訳だったわけだ。

唐津というところから毎日のように大勢のヤミ船の商売人たちが来て、船に乗る日の契約を取っていった。狭い山道を通してガラクタのような所帯道具が次から次へと運ばれていった。朝鮮に帰るときに着ていこうと希望と一緒に包んでおいた新しい衣装を身に着け、誰もが別れを惜しみながら出発していった。駅はいつも朝鮮人の集合場所のようで、出ていく汽車はどれも朝鮮人でギョウギョウ詰めだった。

朴書房は毎日、先に出発する人たちを見送りに出していた。涙を流して別れていく友人も多かった。朴

書房は自分もすぐに行くからと言いながら、女の子の手を引いて駅に見送りに出た。彼はこの子だけは連れていこうかと考えたが、毎日よろめくようにして家に帰っていった。

しかしある日、朴書房は一人でふらりと私のところに来て、

「安さん。朝鮮で会いましょう」
と、にっこり笑った。

「ええ」

私は、そう答えるしかなかった。

×

×

私はその一週間後に朝鮮へと発った。我々の部隊の順番が一番遅く、そのほかに貯金を下ろしたり今月の賃金を清算したりして、こんなに遅くなったのである。

我々の一行は燕岐隊のほかに堤川の人たちを合わせておよそ百五十名だったが、実際に船に乗ったのは三百名以上だった。というのは炭坑から出ると、唐津までの間にいる朝鮮人たちが押しかけてきたからだ。船はもちろん貨物船で七十八噸しかない。船長はひどい冒険だといって、危険であることを繰り返し説明した。

風の心配があるといってわざわざ予定を一日延ばしたにもかかわらず、出発したあと我々は暴風に遭ってしまった。九州に住みながら私は、九州というところは本当に風が強いところだと思った。初めて海を渡るときもそう思ったものだが、今回ますます物騒なところだと思い知った。朝鮮と日本は一衣帯水ではない。玄海灘は広大な大海で、おまけにひどく危険なところなのだ。

初めて経験した私は死ぬのではないかと思った。帆まで波が持ち上がって船が左右に揺れたときは、そのまま海に逆さまに入っていくような気がした。あの物凄くて恐ろしい波のことはいま思いだしても体が震える。

出発する前、暴風のため海で転覆する船がたくさんあり、数百人、数千人が犠牲になったという話を聞いたが、それと同じ運命をたどるのだと思い、行

けども行けども広い海原と狂ったように逆巻く波の中で呆然とするのみであった。

ちょうど一昼夜海上をさまよったあげく、どこかの陸地に着いた。聞けばそこが話に聞いていた対馬という島だった。

一見して小さな島だとわかった。我々の船が湾内に入ったときは風がやんで静かだったが、そこも少し前まで暴風が吹きあれたらしく、転覆したり、衝突して壊れた船があちこちに見えた。多くの避難船が入って混みあい、船からぶちまけられる汚物で近海の水がひどく汚なかった。

皆はボンヤリと目を開き、

「なんだと？ 対馬だと？」

「ウム、ここも朝鮮だ」

など、ブツブツ言っている。どういう根拠で朝鮮だと思うのか、不思議だった。

しかし言われてみれば、九州ではあんなに山に木が茂っているのにさっぱり見られなかった松の木が、ここではたくさん目につく。やはり朝鮮に近いようだった。

海岸にそって東西に長く伸びた舗装道路があり、海岸線から縦に奥に入るとそこが島一番の繁華街らしく、赤い屋根屋根が遠くから眺められた。その後ろに高い山がそびえ、その山がこの島全体を抱えているような印象を与えて、さっき言った小さい島だと思わせる特徴を作りだしているのだ。山の上にはトンビがいやにたくさん騒いでいた。

誰もが船の中では苦しくて食べられずぐったりしていたが、ボートを下ろして鍋や釜を積みこみ、陸で飯を炊くために上陸した。

船酔いというのは病気でない。船ではほとんど死んだようだった私も陸で新鮮な空気にあたり、汚れた顔と手を山の湧水で洗ってからシャツも洗って濡れたまま身につけたりしているうちに、みるみる健康と元気を取りもどして気分爽快になった。

山裾の片隅で釜をかけて飯を炊いた。島の中には朝鮮人がたくさん住んでいるらしく、朝鮮の女たちがバガジに飯の材料を入れて湧水で洗っていた。見ると米を持った人は一人もおらず全員が玉蜀黍、粟、キビなどだ。米はここではかなりの貴重品のようだった。

家も生活ぶりも、長く根を下ろして暮らすというよりはその日暮らしで、明日にでも出ていけるようにしていることが一目でわかった。

だが肉汁と酒を出すという一軒の家に入り、部屋の調度品のなかに朝鮮式の米甕や錫の黄色い食器を発見したときは、我が朝鮮人のいわゆる朝鮮的な民族性と、現在この島で暮らしているように、あちこちとさすらっている我が民族の流浪の身の上が想われて切なくなった。

こう考えるのは私の認識不足なのかもしれない。しかし対馬という絶海の孤島で、朝鮮の深鉢と平鉢で朝鮮の料理を食べマッコリを飲んでいることが、私にはひどく不思議に思われた。

ところで、私にとって本当に驚くべきことが起きた。それは、一週間前に朝鮮に出発した朴書房と意外にも島で出会ったことである。

風が凧いだから天気を見て夜には出航するというので、夕方、全員がまたボートに乗って船にもどろうとしていると、えらくボロボロの恰好をした朝鮮人労働者が何人か私を訪ねてきて挨拶をした。その中に朴書房がいたのである。

彼らは我々より先に密航船に乗って朝鮮に向かった人たちで、我々と同じく対馬に避難したときに船から下りたという。また故国に行きたいが無一文なのでタダで船に乗せてくれという交渉だった。どうやらこの島で金を稼げないかと思って下りてみたが、うまく行かなかったらしい。

しかし朴書房だけは違った。対馬に着いた彼が朝鮮に向かう船に乗らなかったのは、九州に妻子を残してきたものの、やはりこのまま発つことはできないと思ったためだった。彼がほかの労働者と一緒にやってきたのも船に乗る交渉のためではなく、島の中でうろついていて皆が行くので見物に来たのだった。

私は彼らの希望どおり全員乗船させた。朴書房にも乗るように言うと、彼は放心したようにため息をついてぼんやり眺めてから、私の手首を引いて山の片隅に行った。

「安さん。行けないよ」という言葉が答えだった。海で暴風に遭ったのも自分の罪への天罰だったと彼は解釈しており、妻子を

連れていくなるともかく、一人で朝鮮に逃げだせば必ずやまた風に遭って海で死んでしまうというのである。

「ふん。そんなはずがあるかね」

私は鼻で笑いながら断固として否定したが、彼は、「いいや。俺が悪かったんだ。俺が悪かったんだ」と首を左右にふりつづけ、妻子が毎晩夢に出てくるとか、子供たちがどんなに可哀想かという話をして自分の運命を嘆いた。実際、彼は断腸の悲しみと骨に沁みいる悩みに打ち勝てないらしく、顔がやつれて蒼白だった。きれいだったパジ・チョゴリも汚れてよれよれだった。

どうしても船に乗らず、もう少し考えてから機会を見て九州に妻子を連れにいくと言うので、私は仕方なく彼と別れて船にもどった。彼は寂しげに浜辺に一人で立ち、遙かに広がる海を眺めていた。

船長は夜には出帆すると言っていたが、また懸念が生じたと言って一晩停泊し、翌朝十時ころに出発した。

天気のよい、秋の爽快な朝だった。船が静かに動きはじめたので、私は船先に立って清々しい風にあたった。ふと見ると朴書房がまたもや海岸に出てきて立っている。離れながら手をふると、彼も気がついて何度もお辞儀をした。船が入り江の外に出たときに見ると、彼はまるで不動の石像のごとく立ちつくしていた。

それから二ヵ月して、私はソウルで再び朴書房に会った。そのときの彼は、島で見た彼とは別人だった。最近の鍾路でどこでもいる人々のように平凡で活気があり、また威勢がよかった。

「朴……」

私は彼に会ってとてもうれしかった。しかし彼は、私の好奇心やうれしさなど、すべての気持ちに気がついていながら避ける気配であった。何となく、ぎこちなかった。彼は私の問いを拒否するかのようには挨拶話だけして、そそくさと人混みのなかに消えていった。彼のうしろ姿を眺めながら、私は紺碧の波の中に寂しく立っている島——島を思った。何となく朴書房は島だという感じを私に与えた。だが彼の男らしさが私をいくらか安心させた。

3. 「馬」

北から南に向かって無数の馬の群れが押しよせてきた。

負けて逃げていく日本軍の軍用馬だ。

鉄道沿線の町々に残っていた日本軍は、米軍の命令で仁川に行ってから日本に帰るとのことだった。

汽車の上から見ると、京城から南の駐車場の近くは広場、道ばた、山の斜面、畑の畝、あらゆるところに馬が散らばり、秋を迎えて見事に黄葉した草木と一緒に馬の群れの橙色は、見捨てられた者たちの一種独特な雰囲気をかもしだしていた。

それは荒廃した情景だった。冷え冷えとした痛ましき以上の、恐ろしく混乱した情景。そして白い埃——兵士と馬の群れと貨物自動車の行列は、いつも白い土埃をもうもうと舞い上がらせて、その情景をいっそう雑然とさせた。

敗軍の兵士の群れが押しよせて去ったあとも、馬の群れはあちこちに残っていた。逃げていく日本の軍隊が朝鮮人に売っていくからだ。

この町の市場の、川原の鉄橋に面した丘の上にも何匹かの馬が繋がれていた。

「なに？ あれを五十円で買ったのか！」

「おい。ソウルじゃ、タダだったそうさ！」

「あいつらの馬を買うことはないぜ。投げ売りして残ったのは放っていくそうじゃないか」

「死にかけた馬もいるんだとさ」

「毎日注射して、それて持たせている馬もあるそうさ」

「そんな馬を買ってどうするつもりだい？」

「安いんだよ。数千円だった馬が五十円とか百円だぜ。タダ同然だ」

馬の前に立ち、まじまじと馬を見たりアゴで指したりしながら、人々はこんな言葉を交わした。

どの馬も鞍を外しているのが目についた。傷やただれはないが、傷やただれのように毛が白く落ちているのが醜かった。腰に差した刀と皮ベルトを外して尾がない鳥みたいになった日本兵を連想させた。

そんな馬の姿はそのまま、敗亡していく日本帝国主義を表わしているかのようだった。昨日までは雄々

しく荒々しかった奴がいまでは背骨が浮きだし、毛並みも汚らしくなって丘の上をうろついている姿は、ひどく惨めたらしかった。

「ふん。ありゃ、まさに日本の奴らの運命だな！……お前のザマは倭奴のザマだ！……」

去年、徴用されて日本の炭坑に行き、数日前にもどってきた徳万は口に出してそう皮肉った。

機会があるごとに彼はこうやって口に出して皮肉るのだった。そうすると憂さが少し晴れるような気がする。彼は馬たちが大嫌いで憎らしかった。馬から日本人の臭いがするような気がするのだ。兵士や刀、銃、大砲はもちろんのこと、一番嫌いだった巡査、その巡査が立てる恐ろしげな足音、郡守と面長の顔、聞いてもわからない日本語、威厳がありすぎて怖いほどの日本人たちの態度、こうしたものがワッと押しよせてくる気がした。

それともう一つ、日本から帰ってきて見た日本人の惨めな姿——釜山の埠頭にずらりと並んだ乞食がみすぼらしい恰好で首を深く垂らし、朝鮮人と目が合うとそっと目を伏せていたあの姿を感じるのだ。

「ふん……」

もう一度鼻を鳴らして陽当たりの良い芝の上にはしゃがみこみ、また不満をこぼそうとしていると、

「こりゃ、徳万じゃないか。よく帰ってきたな……」

と挨拶する者がいる。ふり返ってみると黄生員〔生員は年配者を呼ぶときつける呼称〕だ。

「死なずにもどって何よりだ。村の連中もみな心配していたぞ……」

黄生員は徳万が無事にもどったことを祝ってくれた。

（ふん、そうかい）

徳万はうれしくなかった。自分が逃亡すれば故郷にいる家族がひどい目に遭うと思って必死の覚悟であそこにいたとき、役人に取り入って故郷に残った奴らは何をやっていたというのだ。それどころか黄生員は、町の李道士という地主と話しをつけて、徳万が耕していた五マジキ〔田畑の面積の単位〕の小作権を奪ってしまったのだ。

遠い日本の北九州の地にいたとき徳万は、かよわ

い女一人で野良仕事もできず、やったところで全部供出させられるので、李道士と黄生員の勧めで土地を手放したという妻の手紙を受け取って、仕事も手につかずに一日中泣いたものだった。

黄生員は、息子が市場で商売をして生活の心配がないくせに、金をかき集めるのに余念がない。あれこれと儲けごとを探してまわる黄生員が、徳万にはひどく憎かった。白髪まじりの老人がとりあえず謝るしかないと思って自分の機嫌を取っているのがイヤで堪らない。それで横にいる馬に向かって、

「この馬の野郎、日本人のザマをしやがって……」

と声を上げて怒鳴った。目を丸くして聞いていた黄生員は、徳万の顔色をうかがいながら、

「なんで日本人のザマなのかね」と聞いた。

「すっかりくたばったザマが、日本人のやつらみたいじゃないですか」

そう言うと、黄生員は屁とも思わぬように「ハハハ」と笑った。

「これはワシが買った馬じゃ。日本人のザマなどしておらん。丘の上で悠々としているところなど、解放されたわれわれ朝鮮人みたいではないか！……」

（おや何だと。解放された朝鮮人だと？）

黄生員の言葉を聞いてよく考えてみると、確かに鞍をはずして手綱を緩め、丘の上で草ばかり食んでいる姿はどう見ても人の手から自由になった姿だ。

（言われてみればそうだ。解放された朝鮮人だ！）と言うしかなかった。

それにしても、どうして馬はあんなふうなんだ。ひどく無気力でわびしく、悲しそうじゃないか。そのとき徳万はふと自分自身のことを考えた。その瞬間、

「そうじゃない。馬は俺だ。この徳万だ！……」という考えが浮かんだ。

解放されたとか、朝鮮が独立したとかいっても、実際のところ徳万はちっともうれしくなかった。解放されたおかげで日本から簡単に帰ってこれたのは確かだが、帰ってから大きな苦痛があった。他人の

二倍、いや他人にはない苦痛が彼にはあった。

昨日も一昨日も、彼は馬のように元気がなく丘の上に立ってため息をついていた。彼が徴用で炭坑に行ったのは去年のちょうど今頃だった。そのときも田には稲が黄色く実り、収穫がうまくいったことを告げていた。ところが今年帰ってみれば、まれに見る豊作で収穫は昨年以上だというのに、それはすべて他人のものなのだ。まぎれもなく自分の田にある稲株と稲穂を見ながら、これが自分のものではなく他人のものであることを何度も自分に言い聞かせ、この事実を受けいれるために苦労した。

家では食べる米がなくなったが、田から新米を刈り取って食べることはできなかった。米瓶をのぞきこむと、空の瓶の中に米ヌカがこびりついたフクベがぼつんと転がっている。毒舌家の妻は、徳万がぼろぼろとしてるから徴用されたのだとか、人は行ってすぐ逃げてきたのに、言うなりにこき使われるなんてノロマだとか、他の人のように金も稼いでこなかったとか、女は夫のバルチャに頼るしかないのに徳万のバルチャがひどいから自分までひどい目に遭うのだなどと散々罵った。そんなとき徳万は、いまに良くなる、いまに良くなるからと言って、そっと逃げだすのが関の山だった。

「ところで、徳万！」

黄生員が、声の調子を改めて彼の名を呼んだ。

「ほかでもないが、うちの仕事をしてくれんかな。あのな、お前を徴用に送ったのは面長だ！面長のやつは殴られて死にそこない、さっさとソウルに逃げてしもうた！……土地を取り上げたのは、地主じゃ、ワシに罪があるわけじゃない。ワシといがみ合うことはないはずじゃ……」

土地を五マジキ取っていったことへの弁明であり、農作業を手伝ってくれという丁重な頼みだった。日本から、満州から、毎日のように人間は帰ってくるが、誰もがヤミ商売か、でなければカネがそこらにゴロゴロしているせいか賭博に夢中になり、遊びまわるばかりで村の農作業を手伝うものがないのだ。徳万はヤミ商売とも賭け事とも縁がなかった。日本から帰ってくるとき六百円余り持ってきたが、最近のような物価高ではカネのうちにも入らない。すぐ

にも賃仕事をしなくては食べていけないのだ。

徳万は黄生員の家仕事を引き受けた。黄生員はマッコリをひと壇持ってきてねぎらった。しかし徳万の心はひどく痛んだ。田にあふれる黄色い稲は自分のものはずなのに、どうして黄生員のものなのだ。彼は胸が詰まりそうだった。

今年の今頃、彼はその田から刈りとった稲を自分の家に持っていった。だが今回は同じ田から刈りとった稲を黄生員の家担いでいくのだ。稲束を担いで自分の家の前を通るにしのびず、彼はわざわざ遠まわりして黄生員の家に行った。まともに食べられないせいで顔色が青い子供たち、空の米瓶をヒステリックに音を立てて引っ掻いている妻の目、それを考えるたびに徳万には稲束がますます重かった。

仕事をしながらも上の空だった。そのために徳万は大失敗をしてしまった。自分の家の前を通らないつもりが逆に通ってしまい、黄生員の庭に置くべき稲束を知らぬまに自分の家の庭に置いてしまったのだ。何年間もやってきた習慣のせいだった。

「しまった」

そう呟いたときは遅かった。きれいな庭に置かれた稲束は、白砂の上に躍り上った魚のように神聖で、農民の目にはとても印象的だった。

ドキドキする胸を抑えて何も考えられないまま、彼はすぐに庭を出て柴の戸を閉めてしまった。とりあえず村人の目から隠すためだ。

またチゲを担いで田に向かいながら、皆が自分を見ているような気がした。小川で洗濯をしている妻に呼ばれるような気がした。後ろから黄生員が息を切らせて追いかけてくるような気がした。黄生員はひどく驚き慌てふためいた顔をしている。

「ドロボー」

という声が今にも聞こえるような気がする。

その時だ。丘の上にいる馬を徳万は牛と勘違いした。丘に、手綱に、杭……のんびりと草を食べている動物は当然のこと牛だと思った。それで、おとなしく従順な牛に対して何の警戒もせず、触れそうなほど近くを通りながら手を伸ばして尻を撫でてやろうと思ったその瞬間、いきなり馬が後ろ脚を上げて徳万を蹴った。

まともに当たったら即死したはずだ。下腹をかすって太腿あたりに逸れたが、太腿の下が引きちぎられたような気がした。彼はつんのめって丘の下の川べりに転げ落ちた。

「誰かが怪我したぞー」

叫び声が聞こえた。徳万が立ち上がれないので人々が集まって抱きかかえた。右足をやられたのに、右足だけでなく左足も地につけることができない。また前に倒れ、人々に担がれて家に帰った。

家に担ぎこまれながら徳万は、自分が馬に蹴られて負傷したことを忘れた。それより大きな心配が先立ったからだ。庭に置いた稲束のことだ。なぜ、すぐに黄生員の家担いでいかなかったのか。でなければ田に行く前に黄生員に会って、昔の癖で知らぬうちに稲束を自分の家に担いでいったと了解を得ておかなかったのか。稲束を自分の家の庭に置いて戸を閉めてきたのだから、泥棒と言われて当然ではないか。そう思うと痛い中でも額に冷や汗が流れた。

もちろん黄生員は黙っていないだろう。いつかカネのことで自分の息子と喧嘩して、息子を警察に告発したほどの人間だ。息子の結婚式に酒の一杯も村人たちに出さなかった人間だ。マッコリを一本持ってきてねぎらったのはこき使うためであって、自分の田で刈った稲を盗んでいかせるためではない。必ずやこの損を償わせるはずだ。

「泥棒！」

と言って、これまではと打って変わって別人の顔になり、青筋を立てて食ってかかる黄生員を想像した。

その瞬間、

(馬だ！)

という考えが、迷夢のように混乱して苦しんでいる彼の胸を貫いた。

(馬が蹴った！黄生員だ……アイツには本当に罪がないのか？俺を食えなくした黄生員に？馬だ。黄生員は馬だ)

土地を取り上げられたことだけを言うのではない。どちらにしる、黄生員は村で何の役にも立たない、いくなれば毒草みたいな存在であることを徳万は以前から漠然と感じていた。馬が牛でなくて馬であるように、黄生員は自分のような農民ではなくて余り

者なのだ。いわば馬だ。そして自分を蹴った馬は、日本人でもなく、朝鮮人の徳万自身でもなく、商売の儲けばかりを追いかけている村の余計者の黄生員なのだ。人を蹴る乱暴な馬も、それを買った黄生員もただひたすら憎かった。

その晩、徳万は熱を出し、

「牛だ」

「馬だ」

と、ウワゴトを言った。丘の上で牛に乗って牛と遊ぶ夢を見た。翌朝、正気を取りもどして考えると、丘の上には馬がいないような気がした。だが村人に聞いてみると、馬はいるという返事だ。それが徳万には不思議だった。丘の上には馬はおらず、牛がいるとしか思われなかった。その夜も同じ考えと同じ世界をさまよひ、翌日また人に聞いてみた。もちろん人々は丘の上には気性が荒くて汚らしい馬がいると答えた。しかし徳万にはそんな答えがますます不思議だった。嘘のような気がした。馬でなく、絶対に牛がいるとしか思われなかった。

徳万が心配した稲束については何の話も出なかった。かわりに馬の話が出た。徳万を一度蹴った馬は癖がつき、人が近づくとすぐに食ってかかり噛んだり蹴ったりするというのだ。町のある家の子供が蹴られて死にかかったという。

軍用馬だった馬は馬車も引けないし荷も運べない。また日本軍が安く売り払った馬は使い物にならず、すぐ病気で死ぬものばかりだ。そうしたものを選んで売ったのである。

馬をつぶすという噂が飛んだ。しかし旨い牛肉がいくらでもある世間に馬肉を食べる者はないと言って、白丁^{ベクチョン}〔牛の屠殺を業とする階級〕は引き取らなかった。村人の手で馬を叩き殺そうという声がしだいに大きくなった。

ある日、随分と良くなった徳万がようやく縁側の外の陽だまりに出て日向ぼっこをしていると、

「馬だ……」

「馬が逃げたぞ……」

という声が出て、村中が大騒ぎするのが聞こえた。黄生員が、

「大変だ……馬が逃げた……」

と言って走っていく姿が見えた。聞けば、いくら白丁に押しつけても引き取らないので、慣れない村人たちが殺そうとして逃げられたという。馬は山の上から駆けおりて鉄道の方に逃げた。

棍棒を持った人、斧を持った人、ナタを持った人、数十名が馬のあとを追いかけた。市場からも人々が駆けてきて一緒に大声を上げて追いかけた。あたりはひっくり返したように時ならぬ大騒ぎである。

徳万はじっと耳を澄まして遠くから聞こえてくる、馬を殺せという人々の声を聞いていた。彼は馬が逃げたことがうれしかった。平和で、清潔で、安心して寝転がって遊べるあの丘の上から馬がいなくなったことだけで、文句なくうれしかった。

レールの上を走っていた馬は人々に追われてトンネルの中に入っていった。人々はトンネルの中に入れないので反対側の出口に何人か走って行って見張ったが、馬は出てこなかった。険悪な悪魔のように馬がトンネルの長く深い暗黒の中に隠れていることは明らかだった。

まもなく馬が汽車に轢かれて死んだという噂が、徳万に聞こえてきた。脚もバラバラになり、頭も割れたということだ。この世に2つとない血だらけの奇怪な姿を人々は引きずりだした。引きずりだして、トンネルに入るために作った松明を高く上げて歓呼の声を上げた。このことがあってから、あちこちにいた馬は一匹、二匹といなくなり、徳万がほとんど全快して杖を引いて外に出たときは、丘の上には馬でなくて牛、善良で従順な牛がいたのだった。

4. 「火」

陰暦正月十五日――。

朝早く起きて母の部屋に行くと、母が栗を一粒くれた。子供のときからの習慣どおり^{うやうや}恭しく押し戴き、口に入れて噛みしめた。

それから母は薬酒を一杯、温めずによこした。飲むと、香ばしい冷酒が腹の中を気持ちよく刺激する。

小正月の日に生栗とか松の実とかクルミなど固いものを食べさせるのは、おそらく歯が丈夫になるようにという意味だろう。歯は五福の一つだという。

冷酒をそのまま飲むのは一年のあいだ良い言葉だけ聞くことを願ってのことで、こうすると耳も聴きこくなるのだと母はもう一度話してくれた。良い言葉だけ聞くようにという言葉ほど良いものはない。私は昔の風俗のこうした雰囲気がとても好きである。

すきっ腹というより、起きぬけに一杯やったせいで酔いが腹のなかに広がり、これだけでほろ酔い気分だ。

母がまた言った。

「お前はこの家の主人なのだから、今日は最初に外に出て門を開けなさい。そして手を後ろに組んで、大きな咳を三回しながら家の中をぐるりとひと周りするんだよ」

「はい……」

子供の遊びみたいだ。気恥ずかしくもある。だが、これは私の小市民的な幸福感を満足させてくれる。こうすることに幸福を感じるのは私より母の方であるらしい。それなら他のことで孝行できなくても、骨も折れず簡単にできることで年取った母を慰め喜ばせてさしあげようと思った。

そこでまず外に出て門かぬきの門をはずし、手をしっかりと後ろに組んで、

「エヘン」

「エヘン」

「エヘン」

出ない咳をこうやって三回出しながら裏庭をまわった。

その時、うちの向いの丘イソバンに住んでいる李書房の母親が水を汲みにきた。

「どうしたの。小正月の夜明けから水を汲みにきたのかい」

戸ガラスを通して外を見ていた母がびっくりして尋ねた。

「小正月だって、水は飲みますよ」

「おやまあ！昨日は何をしたの。夕方うちに汲んでおけばいいのに」

「娘の家に行って夜遅く帰ってきたんですよ」

「じゃあ、うちが先に汲むから、そのあとにしなさい」

だが私はこのとき、母の言葉に逆らった。母は井

戸端に立っていた私に、つるべで水を汲んで我が家の水桶に先に入れるよう言いつけたが、そうするふりをしながら、私は横に置かれた李書房の母親の小さな水瓶に二度、三度、先に入れてやったのである。

李書房の母親がああやって朝早く我が家の井戸水を汲みにきたのは、我が家より先に水を汲んでいくためだという噂が、午前うちに村中に広がった。そうすれば我が家に入るはずの福が李書房の家に入るというのだ。そう言えば、私が夜明けに門を開けに行ったときミシミシと門が鳴ったが、あれはすでに来ていた李書房の母が、もしや門が開いてないかと思って揺らしたのかもしれない……。

そればかりではない。あの老婦人は十四日つまり昨日の明け方、わが家の門の前の土をこっそり持って行って自分の家の台所に撒いたという。これも井戸水と同じで、他人の福を奪ってくるという迷信である。そんな風習がこの朝鮮では昔から伝わっているのだ。多くの人が踏んだ道の端の清浄な土を持ち返って家の四隅に撒けば、その道を通っていった人の数だけ福が入ってくるといい、十五夜の前日に争ってそれを行なう行事もある。

そんなわけで、私は李書房の母親の行動を恨む気になれなかった。私に福を与えるために祈る私の母も、わが家の福を自分の家族のために欲しがる李書房の母親も、どちらも長い因習と迷信に染まった女人なのだ。小正月の朝、日出前に「暑気ひのであたり」を売る風習は有名である。この日の朝、知り合いに会ってその人の名前を呼び、もし相手が答えたら「俺の暑気あたりを買ってけ！」と叫ぶ。こうやってその年の病気と災難を他人に押しつけてしまうのだ。

隣に住んでいるというのに、私はいまだに李書房の顔を見たことがない。私がソウルから引っ越してきたとき、彼は放浪していたらしい。そして私がソウルに滞在しているあいだに故郷にもどり、報国隊というのに取られて海を渡っていった。

彼が南洋に行ったという話は風の噂で聞いていたが、四年間まったく消息がなくて皆が彼は死んだと信じていたところ、五日前に帰ってきたのである。

だが、そのあいだに彼の家には様々な不幸と悲劇が起きていた。彼が出発して一年後に父親が亡くな

り、それから一年後には寡婦となった母親が息子のようになり、頼りにしていた娘の夫がやはり報国隊に取られて北海道の炭坑に行き、母と嫁と娘の三人がまるで三寡婦のように暮らすことになった。李書房はもどらず、娘の夫だけが昨年四月に北海道から帰ってきたので、母はまた娘の家に行き、暮らすようになった。妻は一人わびしく夫を待っていたが、李書房が現われる十日余り前、正確には陰暦の正月を迎える前、たった一人の六歳の息子を天然痘で失うとそのままだここに消えてしまったのである。

その後、彼女の行方はすぐに判明した。やはり報国隊で日本に行っているあいだに妻に死なれた、小丁里ソジョンニの近くに住む寡夫の後妻になったというのだ。李書房が現われた翌日、彼の母親が嫁のいる場所を探しあてて夫が帰ったという消息を伝えたが、嫁は泣くばかりでもどるといふ言葉はなく、二日後に新しい夫と一緒に姿を隠したという噂が伝わってきた。

姑が娘の家に行かなければ嫁は逃げなかったろうとか、一人息子が死んで姑がいなのは嫁に出ていけというのと同じだとか、一人息子さえ天然痘で死ななければ嫁は待っていたらどうか、李書房がちゃんと手紙を書いていればこんなことにはならなかったとか、李書房の嫁が帰ってこなかったのは良い運命バルヂヤに乗りかえるためだとか、村には様々な話が飛びかった。

だが当事者の李書房はどう思っているのだろうか。私は彼に一度会ってみたかった。隣人としての同情心もあったが、本当はそれよりも小説家としての好奇心が大きかった。彼が帰ってきた日、私は自分の部屋に座りながら彼の慟哭を遠くから聞いた。しばらくは母と息子が泣いていたが、少しすると若い女の声が加わった。もちろん駆けつけた彼の妹のはずだ。(これほど悲愴な慟哭をどうして筆で描けよう!) 彼を訪ねてみようかと、気乗りしないまま家に向かって歩きはじめた私は、あの肺腑えぐを抉るような慟哭を思いだして踵を返した。だから彼の母親がうちの井戸水を先に汲もうが、門前の土をこっそり持ち去ろうが、それどころか我が家に「暑気あたり」を売りつけたとしても、私は冗談めかして「はい、買しましょう」と答えるくらい彼らの不運に同情しており、

反面、あまりに非現実的で非科学的な因習と迷信への依頼心を哀れむ心でいっぱいだった。

小正月にはこのほかにも行事が多い。新羅時代に王が一羽のカラスが届けた「開見則二人死 不開則一人死〔開けば二人が死に、開かずば一人が死ぬ〕』という手紙を読んで、王妃と内通した二人の僧を射殺し、その恩に報いるため毎年正月十五日に薬飯イッコ〔美味しく味つけたおこわ〕を炊いてカラスに食べさせたという故事にちなみ、この日におこわを炊いて食べるというが、どうも最近あまり行われていないようだ。我が家でもおこわの代わりに、昼食にアワ、キビ、小豆、豆、米で五穀米を炊き、肉や干しメンタイとニシン、海苔などを焼いて食べる。豆もやし、ワラビ、乾燥カボチャ、ゼンマイ、キキョウ、山菜、大根の干葉ひばなどもこの日に欠かせない総菜である。この日は家の中に終日香ばしい匂いが漂う。そしてこの日の昼食は九回食べると言って、他人の家であれ自分の家であれ、村人同士で集まって食べることが仕事である。

私は李書房を招いて昼食を一緒にしようと思いついた。このことを母に言うと、

「おまえったら……」

と、李書房の母親のことを快く思っていないらしい母は渋い顔をしたが、私は妻に飲食の準備をするよう言いつけて、黙って立ち上がった。彼の家に着いてみると家は空っぽだった。まず目に入ったのは門の両側の柱の下にたっぷりと撒かれたきれいな黄土である。山裾の新作路から持ってきたのだろう。私は家の中をゆっくり見てまわった。きれいに掃いた道と中庭、縁側の前、空き地、そうした場所には明らかに新しい土が撒かれていた。驚いたのは、誰もいない台所に水瓶がポツンと一つ、竈かまどの上に置かれていたことだ。私は夜明けのことを思いだして、つい笑ってしまった。見たところ、嫁が逃げてから今朝まで人が生活した形跡はないのに、水瓶一つだけが夜明けに汲んできてあるのは、もちろん村の噂を証明している。すると今日の明け方に李書房の母親は我が家よりも先に井戸水を汲み、それも一家の主人である私が自分の手で汲んでやったのだから、いわば大成功である。しかし、それほど望んでいる新

しい福が、果してこれからこの家にやって来るのだろうか、しばらく考えてしまった。

台所は釜も持ち去られ、容器どころか瀬戸物のかけら一つ見あたらない。家は台所と部屋二つで、こう言うともまるで隠者の住む「三間草屋」のようだが、三間草屋と言っても崩れ落ちてほとんど倒れそうなあばら家である。垣は痕跡しか残ってない。門の中に入ると小さな中庭で、そこからも台所の中が丸見えである。所帯道具はすべて母親が娘の家に持ち去ったらしい。

私は縁側^{マル}の前に立って家の中をのぞきこんだ。障子紙がすっかり破れているのでよく見える。新聞紙一枚貼ってない土壁で、カビ臭い土の匂いが鼻^ツを衝いた。真ん中を仕切って小さな部屋二つにしてあるので、上の間^{ウィツカン}〔オンドルの焚口から遠い部屋〕をのぞいてみると、どうやら昔は李書房夫婦の寝室だったらしい。それでも壁のあちこちには紙を貼った跡があり、松の板で作った大きな箱が二つ積まれて、その上に小さな石油缶みたいなものが置いてある。これがいわば夫婦にとっての三層筆筒〔三段になった伝統的なタンズ〕だったのだろう。ほかのものは全部持ち去ったのに、これだけはそのまま残してある。見るからに胸が痛んだ。

李書房とは彼の妹の家で会えた。見れば二、三日前から市場に行くときに土手の上ですれ違い、そのたびに私をじっと見つめていた男性である。彼は昔の日本兵の黄色い外套を着ていた。二、三回彼を見かけ、ソウルから農村に米を買いにきたヤミ屋だと思っていた私は、こうして彼が李書房であると知って不思議な思いにとらわれた。もともと農民の彼は、私が初めて見たときにヤミ屋だと思ったほど、いまでは確実に農民ではなくなっていた。彼の話では米日海軍の激戦地として有名だった太平洋の孤島トラック島に行ってきたというのが、そこで長く過ごすあいだに変わってしまったのだろう。純朴な農民の顔の上につねに鋭く獐猛な表情が流れていて、正式に挨拶を交わしたあとも、土手の上ですれ違いながら私をじっと見つめたときと同じく何かを探るような目つきをするのを見ると、その表情は一時的なものというより完全に癖になっているようだった。

年は三十五歳だというのが四十を越えた人間のように見えた。顔が黒く、頬骨が目につくほど突き出しており、額に刻まれた皺は、彼が語る苦労話はすべて真実だと信じさせるほど深くて印象的だった。

「生きて帰れたのが夢のようです。まだ夢の中にいる気分です……」

彼はこう言った。その語調も忠清道の農民ではなかった。

「初めて釜山に降りて、泣きながら土を撫でてみました。懐かしくて堪らなかったのは朝鮮の水でした。飲み水です……」

こんな言葉を聞くと、まるで長いこと海外の死地をさまよって苦労した大政治家の言葉を聞いているような気がした。忠清道の農民はいつも言葉の最後を「だす」と言う。「だす」でなく正しく「です」と言う人間は、都会の水を飲んだか、それ以上の風に当たった人物だ。

「アメリカのやつらはラバウルとトラックには最後まで上陸できませんでした。それでトラックで最初の原子爆弾を使おうとしました。トラック島にいた海軍は第四艦隊でしたが、最後はどうすることもできず降伏しました」

こうなるとますます李書房などと呼ぶわけにはいかないようだ。「第四艦隊」という言葉を使う朝鮮の農民を前にして、私は呆気にとられた。

トラック島に対する日本軍の占領状況がどうであったかに関する私の知識は今ではすべておぼろだが、李書房の話を知ると、彼は朝鮮を発つとすぐに騙されてトラック島に行ったという。そして、そこに四年間もいたそうだった。最初は飛行場を整備していたが、あとになると守備部隊の候補として強制的に軍事訓練を受けた。もちろん故郷には手紙一通出せず、それが今日の家庭の悲劇に至る原因になったことを暗示した。

サイパンと硫黄島、フィリピンが米軍の手に落ちるとトラック島には急激に食糧がなくなった。一日ジャガイモ一個で生きのびていたが、そのうちネズミやトカゲを食べるようになり、もう少して人間同士が食い合いをするところで日本は降伏し、アメリカ軍が上陸してきたという。

トラック島が砲撃を受けた時のことはとても言葉で言い表わせないほどで、ただもう火の海だったという。

燕岐郡から行ったのが四八人で、生きて帰ったのがわずか七人。もちろんその中には病気で死んだり、飢え死にしたり、半分気が狂って首を括くった人もいたが、ほとんどは砲撃と艦砲射撃の犠牲になったのである。なんと恐ろしく驚くべき死亡率ではないか。これを見てもどれほどのものだったか見当がつくだろうと言った。自分の真の仇で、友人の仇、我が朝鮮人の仇、西洋人の仇、全人類の仇、いや日本人にとっても仇なのは、今回の戦争を最初に始めて最後まで戦争を続けようとした戦争狂の日本人たちだと、彼は異常に興奮した口ぶりで話した。そして今回トラック島に行ってきたおかげで自分一個人でなく多くの人のために生きることを考えるようになったこと、あそこで憎い日本人のために尽くしたことは恥であるから、これからは何であれ朝鮮のために献身的に働きたいと語るのだった。

朝食べる粟、耳が良くなる酒、福への祈り、暑気買い、おこわ、五穀飯、包み飯〔原註：海苔や白山菊で包んで食べること〕、陳菜〔原註：様々な保存用山菜を食べること〕のほかに、小正月の行事としては野焼き遊び、月見、火祭り、踏橋、凧合戦などがある。酒と肉など家から持ってきた様々な料理を李書房と一緒に食べたあと、野焼き遊びに行こうと言うと、「野焼きですか？」

と、彼は急に外国人のような様子で、私をじっと見つめた。

（お前なんかに火というものがわかるのか？）と言うような口調だった。彼は火に対して特別な経験と観念を持っている様子だった。確かに彼と一緒に野に出て実際に野焼きをしてみると、彼は火に対して一種の愛着と情熱まで持っているようだった。

外に出ると、山と野原ではもう野焼きが始まっていた。ここ数年、山の木をやたら切って焚くだけで治山をしていないので、山は木が一本もないただの原っぱである。それで野焼きをするにはおあつらえ向きだった。冬のあいだにすっかり乾燥して焦げ飯スルンジのようになった芝の上でマッチを擦って火をつける

と、黒く焼けた場所を後ろに残しながら炎はしだいに大きくなり、みるみる四方に広がっていく。山の背、原っぱ、土手の上、田の畔、あちらにもこちらにも火炎と白煙が立ちのぼり、なかなかの壮観である。

「ああ！ 火を見ると……。こうやって原っぱでどんどん広がる火を見ると、生き返るような気がします！ 家に帰って初めて胸の苦しさが取れました……」

李書房はこう言った。朝鮮はトラック島よりずっと寒いと言ってそれまで脱がなかった外套のボタンをはずし、「ふうっ」と大きな息をついた。

火が大きくなったので、我々はマッチの代わりに乾燥したナラなどの枯れ枝に火をつけ、好きなところに火をつけてまわった。解放された気分がこの野焼きに集中して爆発したかと思われるほど、今年の野焼きはこれまで私が見た中で最高に盛んだった。

広い野原にはひっきりなしに群衆が集まり、見わたすかぎりどこにも火をつける人々がいて、炎が上がり、天まで昇っていく煙があった。子供たちは火を追いかけたり消したりして飛びまわった。李書房も負けていなかった。大きな火の棒を作り、一步一步進みながら歩数と同じだけの火をつけてまわった。彼は家で飲んだ酒にも酔っていたが、明らかに火にも酔っていた。

彼は私に近づき、それにしてもトラック島で自分が見た火に比べれば、こんなのは火じゃないと言った。この前の正月六日に中天に現われた白い虹と七色の虹を見たかね。自分は釜山で見たのだが、あんなものが天空いっぱい動いている姿を考えてみたまえ。空中で瞬いていた星が一気に頭上に降り注ぐのを想像してみたまえ。それが砲撃と艦砲射撃を受けた私が経験した火柱なのと言った。そんな恐ろしいものを考えなくたって、私はたったこれしきの地上に広がる火をしばらく眺めていただけなのに、頭をふり上げると、天は火が燃えさかっているように怖いほど赤く見えた。

日暮れどきになって人々が帰りはじめた。もう少しして月が出れば、今度は月見をする番だ。広い野原と山の背が焦げているので、暗くなるのが早いよ

うに思われた。こうやって火をつけて焼くのは、伝統行事である野焼き遊びもさることながら、害虫たちを殺すと同時に、草葉の焼けた灰が自然と肥料になることで春の新芽がよく出るようにするためだと思われる。

山の背に沿って下り、李書房が住んでいる家の前に着いた。彼が突然、

「安さん！」

と、私を呼んだ。何か考えている様子だった。トラック島では、灯火管制があるといつもわざと火をつけなくなったという。あいつらに連れられていったあと、何か小さなミスをしてひどく打たれた日など、絶対に揮発油倉庫に火を放ってやると何度も誓ったのに実際には一度も実行できなかったことが、食べたものが喉に引っかかっているようで、思いだすたびに悔しいという。彼の話聞いて私は、去年北九州に徴用されていったときの似たような話を思い出した。炭坑の中だけに閉じ込められている朝鮮人たちは空襲警報が鳴って飛行機が現われると、歓声を上げて無条件で喜んだ。現状破壊という漠然としたものであっても希望には違いなかったからだ。こっそり貯めた石炭に火をつけて灯火管制を妨害したいという言葉も多くの仲間から聞かされた。

別れて坂道を下りようとする、彼は手を挙げて私を止めた。ちょっと待てと合図をして自分の家に入り、さっき私が障子の穴から見たあの三層箆筒を一個ずつ運んできた。そのほかに細々した品物まで中庭に投げだし、これを壊して火を焚き、月見をしようと言う。月見をするときも、火を焚いて松明を点す風習がある。彼が所帯道具を燃やすことに対し、私は彼の悲しい心情を推し量ることはできたが、表面的であれ制止しないわけにいなかった。

「こらえなさい。朝鮮が解放されたのですから、これからは嬉しいことが沢山ありますよ」

私はこう言って慰め、李書房がすすり泣いているのをそのままにして家に帰った。ひどく疲れていた。前に話したように、この日は昼飯を九回食べるというくらい一日中食べ続けるので、夕食は特に準備しない。それで妻はいつもより暇らしく、さっさと前掛けを外して裏庭に立ち、昇ったばかりの月を見て

いた。一年のうちで正月の一五夜と八月の十五夜の月が一番大きく、澄んでいて明るく、ふくよかで美しいという。今夜の月を最初に見た人は縁起がよくて福を授かるというが、そんなことを考えなくても、あの見事で美しい月を仰ぎ見ることができただけで充分だ。

子供のときから長いこと、毎年この夜に受けてきた感激がよみがえる。印象的で驚異的で、神秘的な童心と詩心を心に注ぎこんでくれたあの月を、いま再び目の前で眺めているのだ。いつだって月は天に浮かんでいるものだが、今日の月はそれこそ東の方からまったく新しく昇って「ほら、ごらん」とばかりに天空に浮かんでいるように思われる。それで妻は、あそこの尾根に登って干し竿で打ったら、月が引っかかって落ちてきそうだと聞いた。

今夜の月が白みがかれば来年は雨が多くて豊年で、赤みがかれば日照りで凶年だという。私の目には月が赤く見えるのに、妻は白いと言い張った。私が正しければ凶年だ。とうとう私は仕方なく、自分に月が赤く見えるのは火遊びをしたばかりだからだと、さっきのことを思いだしながら譲歩した。すると妻は月に向かって腰を曲げ、鬱陶しいお辞儀チヨルを二回してから私にもそうしろと言う。月を迎える風俗である。いや、それはできんと言うと、じゃあ黙禱もくとうするみたいに頭だけ下げろと言うので、私は黙って頭を下げた。弁明ではないが、これは今日の明け方、母の言いつけどおりに手を後ろに組んで大きな咳を三回しながら家の中をひと周りしたのと同じで、こんなふうにも力もいらす造作ないことで無知な妻をいたわり満足させることができれば、これに越したことはないからだ。しばらくすると踏橋タフキョ〔小正月の夜に橋を踏む行事〕をしに行った母がもどってきて、月の光があんまり明るくて、門を開けるときに自分が開けたんじゃないかと月が押し開けたような気がしたと話した。

ところでこの晩、私は唐突にも我が家から火が出るのではないかという奇怪な強迫観念に襲われ、夜が更けるまで苦しんだ。もちろん私は小説を書く人間だからこれよりひどい珍奇な空想をすることもあがるが、これはただの空想ではなかった。ソウルで大

火事があって十軒以上が全焼したときの焼け跡や、さっきの野焼きで黒く焦げた山の背や土手が連想され、我が家もきっとそんなふう丸焼けになってしまうという予感に怯え、恐怖は夜が更けるにつれて大きくなった。

それは私が泥酔して飲み屋をまわっているとき、自分はもしや心臓麻痺で卒倒するのではないかと心配になるとか、あるいはソウルに長期滞在しながら田舎の家に何かあったのではないかと、誰かが病気ではないかと心配になるのに似ていた。だが今晚家から火が出るという突発的な心配はまったく初めのことで、今晚に差し迫った心配だけに気が揉めて焦燥し、そのために眠られなかった。

もちろん野焼きを散々したせいだろう。酔ったように野焼きをしていると、自分が火をつけているのに火が枯草から自然と湧き上がるような気がしたが、それと同じように中庭に積んである薪の下や、チゲに積んだままの松の枝から今にも炎が上がるように思われた。台所、納屋の中、軒下、柱の下、煙突の横、どこからでも火が上がりそうだ。ほろ酔い気分だった私は何度も起き上がっては、障子を開けて外を見た。木の葉や軽い藁くずが風に吹かれていくのがまるで火の玉が転がっていくように見え、台所のあたりが月の陰影で少し白っぽく見えると、白煙が立ちはじめたのではないかと、肝をつぶした。

ウトウトしながら夜中の一時か二時ころになった。ついに、

「火事だあ！」

という声に驚いて目が覚めた。見ると我々夫婦が寝ている部屋の障子が赤い。夢中で起きて戸を開けると火だ！炎だ。火、火、火、火、火……。

だが、我が家から出た火ではなかった。向かいの家だ。いや、出た火ではない。わざとつけた火のはずだ。人もおらず、生活もなく、火のない台所に水瓶ひとつしかない空き家から火が出るはずがない。私はさっき李書房が自分の所帯道具を燃やそうとするのを押しとどめた。あの所帯道具と一緒に自分の家にも火をつけた李書房が山の上に立ち、降り注ぐ月光を全身に浴びながら火柱となって燃えあがる自分の家を遠く見下ろしている姿——私は直感的にそ

れを想像することができた。

私が見たときにはもう屋根が燃えはじめ、恐ろしい炎が噴き上げていた。一軒家であり、誰もが小正月の遊びで疲れていたために火事に気づくのが遅かったらしい。そのうえ近くには井戸もなく、三間のあばら家はあっけなく焼け落ちてしまった。もちろん出た火ではなくつけた火であるから、燃えやすいよう工夫しておいたのだろう。集まった人々が呆然としているあいだに、火事はまるで人間が息を引取るように峠を越してしまった。消防隊も来ず、他所では見られない静かな火事場だった。遠くから見ると青黒い夢の中の風景のようだった。近くの何軒かの家の屋根だけが、小正月の数時間を黄金色の炎に悩まされながら、この思いがけない大火事をまるで何かを締めくくるフィナーレであるかのように見つめていた。

翌朝、すっかり焼け落ちた黒く汚らしい姿は、遠くから見ると堆肥を積んだ場所を連想させた。だいたい想像がついたのか、村人たちも出火の原因については何も言わなかった。家の主人も親戚も何も話さなかった。

「そうじゃろう……あんなボロボロの凶家、誰も買わんじゃろうし……」

そんな話が聞こえた。李書房の父親と子供が死に、妻が逃げ、家が滅びたこの家を人々は凶家と呼んでいるようだった。

しばらくすると李書房の母親が来て地面にへたりこみ、両足を投げ出して号泣した。

「アイゴー、アイゴー、これは夢かい、幻かい……。前世にどんな罪があって……アイゴー、ああ、サンジンや〔原註：孫の名前〕、サンジンや、お前はどこに行ったの？ お前のおじいさんはどこに行ったの？ アイゴー……うちだって人並みに暮らせると思ったのに……息子がもどり、嫁がもどり、うちも今度は人並みに、幸福に暮らせると思ったのに、アイゴー……」

駆けつけた娘が引き起こしたが、立たずに地面を打っていつまでも痛哭を繰り返していた。

私はそのあと一度、李書房と会った。彼は前よりさらに鋭敏で沈着になったように見えた。見るたび

に、彼はどんどん別人に変わっていくようだった。彼はふたたび故郷を出て遠くに行くつもりだと言った。もちろん今度は朝鮮の中のはずだ。

「戦争が終わったあとも、私はあの島で何か月間も食物なしに暮らしました。本当なら私は島で焼け死ぬか、飢え死にするか、日本人に撃たれて死ぬか、太平洋の海で溺れて死ぬか、自分で首を括って死ぬか、そのどれかのはずでした。私がこうして故郷に帰っているのは、一度死んでよみがえったようなものです。それなのに生き直さずに昔と同じように生きるわけに行きません。私は新しく生きねばなりません……たった一人の母は妹の夫に頼みました。私にはもう父母も妻子も、家も所帯道具もありません。新しい世界を探しにいきます……トラック島に引っ張られるときは家族という荷物が重くて心配でしたが、今回は軽いです。心配しないでください……安さんの言うとおりで。我が朝鮮は解放されたのですから良い世の中が来るでしょう。そのために……」

彼はこう話した。前に家を出たときは不幸を持ち帰ったが、今度はきっと幸福を見つけてくるという希望を話した。私は彼に、もしソウルに来たら、私

もソウルにいるから、昔の丁字屋の向いの白い四階建てのレンガの建物、その四階の朝鮮文学者同盟に訪ねてくるようにと住所を書いて渡しながら何度も頼んだ。私は彼を手離したくなかったのだ。

なぜか——彼と私とを比べれば、過去において私の方が彼より家庭的にずっと幸福だったのは事実である。たとえば小正月の夜、私はこの日の照れくさい行事を忠実にこなす一方、平和な私の家に火事が起きないかというつまらぬ心配をクヨクヨした小心な人間だが、彼は何の愛着も見せずに自分の家に火をつけて過去の悪夢を燃やし破壊した。もちろん必ずしもそうした方法を取るべきだと言うのではないが、ともかくこれは彼と私の現実に対する態度と人間としての距離の大きさを示している。彼は私より不幸である代わりに、古いものを破壊して新しく前進していることを私に直感させる。彼は私と違って不幸だったが、少なくとも私よりも新しく、また少なくとも私よりも進んでいる。そして彼の行動と彼の言葉を思うと、私は彼のすべてを信じられる。私がこれからもう少し大きな小説家をめざすのなら、彼だけでなく、新しく生きようとするすべての新しいタイプの人物を掴む必要があるだろう。

Translations of four short stories by An Hoe-nam, with an exegesis

Setsuko HATANO

Abstract

For this article, I translated four short stories by Korean writer An Hoenam into Japanese and added a commentary. The stories were part of his collection *Fire* published in 1947 by Eulyu Munhwasa (乙酉文化社). They include *An iron chain broken* (鐵鎖 끊어지다), *An island* (섬), *A horse* (말), and *The fire* (불).

An Hoe-nam was born in Seoul in 1909. He debuted as a writer in 1931 and wrote many short stories depicting his private life in a style very similar to the Japanese I-novel. His work mainly described the life of the urban petit bourgeois. In September 1944, he went to Tatsugawa Mine in Saga Prefecture in Kyushu as a forced laborer. It is unclear why a 34-year-old writer like him was conscripted. I suppose that it could be driven by his financial situation. He had fallen into bankruptcy owing to his extravagant lifestyle and drinking habit. However, it appears that he did not work underground as an ordinary coal mining laborer, but rather at the office managing labor. After the defeat of Japan in 1945, he returned to Korea, writing actively and drawing on his experience as a forced laborer, to produce ten short stories as part of *Fire*. The novels written by Korean writers about the return from Manchuria, China, Japan etc. after the Japanese collapse are characterized as Repatriate Novels. His collection *Fire* is one of them.

Later, An Hoe-nam published several novels that were appreciated by critics on the left. In 1948, he crossed 38th parallel to go to North Korea with his family and literary friends after the division of the Korean Peninsula. After the end of the Korean War, many writers who had come from the South were purged. An Hoe-nam was not targeted although there is little information regarding his actions thereafter.